慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ワルラスとオーストリア学派の人々：往復書簡を通じて見た相互関係について
Sub Title	Walras and the Austrian school : the intercommunication documented through their correspondence
Author	武藤, 功 中野, 聡子
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1991
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.84, No.特別号-I (1991. 9) ,p.111- 149
JaLC DOI	10.14991/001.19910901-0111
Abstract	
Notes	富田重夫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19910901-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『三田学会雑誌』84巻特別号—I（1991年9月）

ワルラスとオーストリア学派の人々

——往復書簡を通じて見た相互関係について——

武藤　功*
中野聡子

I．はじめに
II．ワルラスとメンガーの往復書簡
III．ワルラスとベーム・バヴェルクの往復書簡
IV．ヴィーザーからワルラス宛書簡
V．結び

I．はじめに

イギリスのウィリアム・スタンレー・ジェヴォンズ(William Stanley Jevons, 1835-1882)，オーストリアのカール・メンガー（Carl Menger, 1840-1921)，そしてスイス・ローザンヌのレオン・ワルラス（Léon Walras,1834-1910）らによる限界効用理論のほぼ同時的発見は，現代的な意味での経済学の生誕に大きな役割を果した。いわゆる1870年代の「限界革命」(Marginal Revolution）が，それである。

しかしながら，これらの人々は，われわれが彼らをひとまとめにしてしまってもよいほど目的の点でも一致しており，また業績の点でも画一的な取り扱いを許すものなのであろうか。1971年の8月にベラジオで開催された限界革命百年を記念するシンポジウム(1)は，こうした問題に光を投げかけることを念願して組織された。そしてそれは，経済学史の研究者に対して，ジェヴォンズ的思考，オーストリア的思考，そしてワルラス的思考の間のきわめて顕著な相違点に注意を促すこととなった。

本稿は特に，ワルラスとオーストリア学派の創設者達——すなわち，メンガー，ベーム・バヴェルク（Böhm-Bawerk)，ヴィーザー（Friedrich von Wieser）——との間に私的にとりかわされた往復書簡を訳出し，彼らの学説及び方法論上の問題意識の相違を浮き彫りにすることを主たる目的としている。

＊ 筆者二人の共通の大学院指導教授である富田重夫教授のご退任にあたり，日頃ご指導を賜ったことに厚くお礼申し上げます。教授のご健康をお祈りします。

注（1） このシンポジウムの議事録は，次の書物として刊行されている。
R. D. Collison Black, A. W. Coats (eds) *The Marginal Revolution in Economics*, Duke Univ. Pr. 1973. 邦訳　岡山純一・早坂忠訳『経済学と限界革命』(日本経済新聞社，東京　1975)。

これらの書簡がとりかわされた時期，ワルラスはすでにローザンヌ大学の教授として招聘され，『純粋経済学要論』[2]初版を1874年と1877年に第一分冊，第二分冊に分けて出版している。ワルラスは『要論』出版後，その改訂のための研究とともに，貨幣問題の究明のために主力を集中した。『要論』第二版は1889年に，第三版は1896年に，そして決定版は1900年に公刊された。

また，1876年12月，1881年5月及び1882年10月には，いずれも複本位制に関する論文を『ジュルナール・デ・ゼコノミスト』誌上に発表し，のちに「複本位制の数学的理論」[3]と題し，1883年に『社会的富の数学的理論』[4]の中に収録した。ワルラスはその後，銀を規制的貨幣として，金に基礎をおく新しい貨幣制度を提唱する。それは，複合本位貨幣の価格が変化しないように，流通の中に導入したり，引き出したりする銀貨幣と結びついた金単本位制である。そして，1886年には『貨幣理論』[5]を公けにする。

この時期のワルラスの主要論文は，以下の通りである。

1890年「アウスピッツおよびリーベン両氏の価格理論の原理についての考察」[6]

1891年「多数の商品の間の交換について」[7]

1895年「複本位制の危険」[8]

1896年「調停もしくは総括の方法」[9]

「所有権の理論」[10]

「財政問題」[11]

1897年「国家と鉄道」[12]

「自由交換の理論」[13]

注（2） Léon Walras, *Élément d'économie politique pure,* 1874-77, Lausanne. 邦訳　久武雅夫訳『純粋経済学要論』（岩波書店　東京　1983）。

（3） "Théorie mathématique du bimetallisme", *Journal des Economistes,* May 1881, Series 4, Vol. 14, no. 41, pp. 189-199.

（4） "Théorie Mathématique de la Richesse Social", 1883, Lausanne.

（5） "Théorie de la monnaie" 1886, Leipzig, Duncker & Humblot.

（6） "Observations sur le principe de la théorie du prix de MM. Auspitz et Lieben", *Revue d'Economie Politique,* May June, 1890, vol. 4, No. 3, pp. 320-323.

（7） "De l'échange de plusieurs marchandises entre elles", *Memoires et compte-rendu des travaux de la Société,* January, 1891, 5 th Series, vol. 44, No. 1, 42-49.

（8） "Le péril bimetalliste, *Revue Socialiste*", July 15, 1895, vol. 22, No. 127, pp. 14-25.

（9） "Méthode de conciliation ou de synthèse", *Revue Socialiste,* April 15, 1896, vol. 23, No. 136, pp. 385-406.

（10） "Théorie de la propriete", *Revue Socialiste,* June-July, 1896, vol. 23, No. 138, pp. 668-681 and vol. 24, No. 139, pp. 23-25.

（11） "Le problèm fiscal", *Revue Socialiste,* October and November, 1896, vol. 24, No. 142 and 143, pp. 386-400 and 537-551.

（12） "L'Etat et les chemins de fer", *Revue du droit public et de la science politique,* 1897.

（13） "Théorie du libre échange", *Revue d'Economic Politique,* July, 1897, vol. 11, No. 7, pp. 649-664.

「応用経済学と賃金の防衛」[14]

1898年「信用の理論」[15]

「ウィーンの貯蓄銀行と社会会計」[16]

「ある経済・社会学説の粗描」[17]

これらの論文のうち，1890年及び1891年の二つの論文は，『要論』の第三版に付録として加えられた。1896年に発表された三つの論文は，その年に『社会経済学研究（社会的富の分配の理論）』の中に収録された。上に挙げた残りの七つの小論は，1886年の『貨幣理論』とともに『応用経済学研究（社会的富の生産の理論）』に含められたものである。

1870年代の前半には，ジェヴォンズとの文通をはじめとして，ワルラスは自らの理論の先駆者に関する知識を広め，同時に自分の業績の流布と足固めを行う。また，オーストリア学派の創設者達のほかに，1880年代前半には，マーシャル（Alfred Marshall），ウィックスティード（Philip Henry Wicksteed），エッジワース（Francis Ysidro Edgeworth）らとの文通が行われる。ここでの議論の中心は，限界効用理論と経済学における数学の役割についてである。

1890年代に入ると，ワルラスの関心は，上の年譜から分かるように純粋経済学とともに，社会経済学及び応用経済学へと向かっていたのである。そして，1894年からは，限界生産力論争が，ウィックスティード，バローネ（Enrico Barone），パレート（Vilfred Pareto）らを中心に繰り広げられることになる。

以下ではまず，ワルラスとメンガーの間でとりかわされた書簡を見ることとする。そこでの主な議論は，経済学の「方法」をめぐる一点に集約される。そこから，両者の抱いている科学観の相違が浮き彫りにされるであろう。そして次に，ワルラスとベーム・バヴェルクとの間の往復書簡をとりあげる。そこでは，財の測り方——離散的であるか，連続的であるか——換言すれば，財の分割可能性の問題と，資本利子の問題についての具体的な経済学上の議論がなされている。最後に，ヴィーザーからワルラスに宛てた二通の書簡を紹介する。これに対するワルラスの返信はなく，ヴィーザーの書簡の中には，理論あるいは方法論のいずれについても実質的な議論は含まれていない。

II. ワルラスとメンガーの往復書簡

カール・メンガーは，1871年に『国民経済学原理』[18]を出版し，その業績により，翌72年にウィー

注 (14) "L'Economique appliquée et la defense des salaires", *Revue d'Economie Politique*, December, 1897, vol. 11, No. 10, pp. 1018-1036.

(15) "Théorie du crédit", *Revue d'Economie Politique*, February, 1898, vol. 12, No. 2, pp. 128-143.

(16) "La caisse d'épargne de Vienne et le comptabilisme social", *Revue d'Economie Politique*, March, 1898, vol. 12, No. 3, pp. 202-220.

(17) "Esquisse d'une doctorine économique et social", *Gazette de Lausanne*, July 14 and 18.

ン大学の私講師に任用され，翌73年には員外教授に昇格し，さらに1879年には正教授に就任した。彼は1883年に『経済学の方法』[19]を著し，その年から四年間ドイツ歴史学派とのいわゆる「方法論争」を展開する。しかしこの華々しかった方法論争とは別に，メンガーの科学観についてより多くの光明を与えてくれるのが，この時期ワルラスとの間にとりかわされた書簡なのである。彼らの文通は，1883年にヨハン・ドルニス（Johan d'Aulunis）の仲介によって始まった。そのとき，ワルラスは49歳，メンガーは43歳であった。彼らの間には，ワルラスから三通，メンガーから四通，合計七通の書簡がとりかわされた。そしてそれは，ワルラスがメンガーに対して『社会的富の数学的理論』を贈呈したことに対するメンガーの礼状をもって始まる。

566[20]　メンガーからワルラスへ

ウィーン

1883年6月28日

拝啓

まず何よりも，ご新著『社会的富の数学的理論』のご恵送にあずかりまことにありがとうございます。ここ数年来，貴下の経済科学の領域における，私のものときわめて類似しているお仕事に注意を払ってきただけに，それに大きな興味を抱きました。

同時に1871年に出版した著作『国民経済学原理』を一部送らせていただきます。ドイツにおいてそれが最初に公けにされた時よりも，最近ではより注目されているこの著作をご覧になって，私もまた交換のメカニズム及び価格決定の説明の問題を，経済学者の支配的な学派とは反対の方法[21]によって解決しようと試みたことを，お認めいただけますならば幸いです。

しかしながら，いわゆる数学的方法によって私達の学問を取り扱うことに，賛同いたしません。とりわけ，数学的方法は本質的に説明及び証明の方法であって，研究の方法ではないと思っています。真または偽の，経験的または精密的な，歴史的発展法則あるいは大数の法則などのすべての経済学の法則は，実のところ数学的形式を帯び，または幾何学的な表現によって証明されています。そのような形式は，私達の学問の多くの問題にとって非常に有用ではありますが，研究の本質には到達しないのです。単に非常にわずかな場合においてのみ，とりわけ全く量的関係が重要な場合においてのみ，数学はその資格において研究を新しい結果へと導くのです。しかしこの場合において

注（18）Carl Menger, *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre,* 1 Aufl. 1871 Wien. 邦訳　安井琢磨訳『国民経済学原理』（日本評論社　東京　1937）。

（19）Carl Menger, *Untersuchungen über die Methode der Socialwissenschaften und der Politischen Ökonomie insbesondere*: 1883 Leipzig. 邦訳　吉田昇三訳『経済学の方法』（日本経済評論社　東京　1986）。

（20）各書簡の前の番号は，William Jaffé 編の Correspondence of Leon Walras and Related Papers (North-Holland Publishing Company Amsterdam 1965) の Letter No. を指す。

（21）ここで「経済学者の支配的な学派とは反対の方法」とは，Letter No. 569 からも分かるように，経験主義とりわけ帰納的方法に対して演繹的方法を意味する。

さえ，数学は唯一の方法なのではなくて，単に経済学の補助学であるにすぎません。

そして私について言えば，私の研究の目的は，経済の複雑な現象をそれらの真の原因に，いわば原因の構成要素に還元し，そして前述の経済学の複雑な現象がそれによって再び生起する法則の研究へと向かうことです。研究の結果は，数学的な表現形式によって飾ることができましょう。数学的表現は，それらの証明にあずかって力があるでしょう。しかしながら表現の数学的方法は，私が提起した課題の本質には少しも到達しえないのです。

これ以上言葉を重ねるよりも，さらに正確な意味合いを知るために，問題の著作をご覧いただきたく存じます。おそらく，貴下によっては引用されずに，この方法に同じくずっと以前から従っている経済学者の長い系譜があること，さらにクールノー（A. Cournot），ゴッセン（H. Gossen），ジェヴォンズのことをお知りになって，興味をもたれることでしょう。あえて，次の著作にご注目いただきたく存じます。

N. F. カナール『政治経済学原理』パリ　1801（とりわけ23ページ及びそれ以降，153ページとそれ以降）

C. クロンケ『租税の本性とその作用の観点から考察された租税の本質』ダルムシュータート及びギーセン　1804（とりわけ7ページ以降。著作の諸々に）

グラム・ゼロルグ・フォン・ブグアイ『国民経済学理論——一つの新構想とより多くの個人的見解を求めて——』一枚の銅版付，ライプツィヒ　1815（とりわけ14ページ以降）続いていくつかの補論が出された。

カール・ハインリッヒ・ラウ『国民経済学原理』第7版　ライプツィヒ及びハイデルベルグ　1863　付録の586ページ（ここには価格曲線がある）

フランチェスコ・フオコ　経済学小論II　ピサ　1827（とりわけ第2章の61ページ政治経済学への代数の適用）

M. フォン・マンゴルト『国民経済学摘要』シュッツトガルト　1863（とりわけ46ページ，以降）ここには多くの幾何学的表現があります。

I. H. フォン・チューネン『孤立国』ロストックII　1842-50 二版（とりわけ第二章第一節　120ページ以降及び諸々に）

きっと，クールノーの『原理』が新しい版で公けにされたことをご存じでしょう。そしておそらくここに挙げた人々をご存じのことと思います。もしもお持ちでないものが多少なりともありましたら，それをお送りする用意ができています。

ご新著をお送りいただいたことを重ねて感謝いたします。

敬具

カール・メンガー

ここでのメンガーの主張の要点は，政治経済学の方法に関するものに集約される。メンガーの論点をここで簡単に整理しておくことにする。

メンガーが国民経済学において追求した研究方針は，彼のいう「精密法則」の確立を目指す研究方針である。「精密法則」とは，現象の厳密な法則であり，「ただ単に例外のないものとして現れるばかりではなく，われわれの認識通路の点からしてまさに例外のないことを保証している，現象継起のなかでの規則性，一般に『自然法則』と呼ばれているが，『精密法則』と呼んだ方がふさわしい現象の法則」[22]のことである。そしてこのような「精密法則」は，以下の過程を通じて獲得されるという。まず，現実的なもののもっとも簡単な要素を発見する。そして，そのもっとも簡単な要素に性質相応の測度を当て，この測度を確保しつつこれらの要素から複雑な経済現象がいかに生じ来るかを今一度研究するのである。言い換えれば，メンガーは，すべての経済現象の根底にある「究極的かつ一般的原因」を析出し，今度は逆に，それから出発して，個々の経済現象の派生する経緯を因果の連鎖として解明しなければならないと考えているのである。そしてその「究極的かつ一般的原因」は，経済現象を究極において統制し，それらを経済現象たらしめている「本質」であり，あくまでも一つの実在でなければならなかった。メンガーは，この「究極的かつ一般的原因」を探る方法を「分析的」方法と呼び，そこから個々の経済現象の派生する経緯を解明する方法を「総合的」あるいは「構成的」方法と呼んでいる。(Letter 602 参照) そして彼の目的に適う方法は，この「分析的—総合的」あるいは「分析的—構成的」方法でしかなかった。

そしてメンガーは，ワルラスの採用した数学的方法に部分的に否定的態度をとる。メンガーとて，数学的方法が彼の目的に適うものであれば，あえて反対はしなかったであろう。しかしメンガーは，数学的方法がこうした研究の手続きを，とりわけ「分析的」方法の手続きを踏まずに「勝手な公理から出発する」(Letter 602) と考えたのである。それは，この研究の手続きを踏まないがゆえに合理主義の誤謬に陥るものと考えたのである。メンガーの言う合理主義とは，「分析的」方法の手続きを踏まずに，先験的な公理から出発する演繹的方法のことを指している。

「『理論』および『体系』の概念の誤った解釈から，これらの概念をたんに先験的公理から演繹的にひきだされた命題，またはこうした命題からなる学説と理解する多くのフランスの経済学者も，(歴史学派と——引用者) 同じ誤謬に陥っている。」[23][24]

また，書簡の中で，大数の法則とともに，数学的形式を帯びている法則として，歴史的発展法則が挙げられているが，メンガーにとっては，歴史と統計学とは，個別的なものの認識を目指す科学

注 (22) Menger, C. *Untersuchungen*, S. 38. 同邦訳書48ページ。
(23) Menger, C. Ibid. S. 16, 同邦訳書22ページ。
(24) メンガーの方法論については，次の論文を参照されたい。
武藤　功「メンガー『国民経済学原理』の哲学的基礎」『三田学会雑誌』81巻4号 (1989年1月)。
武藤　功「C・メンガーの『欲望』概念をめぐる一考察」『三田学会雑誌』82巻3号 (1989年10月)。

として同じ範疇に属するものであること，さらにメンガーは歴史の趨勢に関する発展法則は定量的な考察によって獲得されるものを考えている，という点のみ指摘しておこう。[25]

最後に，メンガーがワルラスに対して七人の経済学者の名前を挙げ，それらへのワルラスの注意を喚起しているが，この点についていくつかの補足的説明をしておきたい。まず，ラウの著作はすでに1826年に出版されている。メンガーの指摘している1863年版は，メンガーが経済理論の研究のために書き込みをした「手沢本」として，メンガー文庫に保存されているものである。[26]

さて，メンガーの挙げたこれらの人物の中で，ワルラスにとって初めての名前があったであろうか。ジェヴォンズは，『経済学の理論』[27]の第二版の準備中に，そこへ数理経済学関連の文献目録を掲載するつもりであった。彼はその写しをワルラスに送り，その目録を『ジュルナール・デ・ゼコノミスト』誌上に掲載するよう依頼する。そしてそれは，1878年12月号に掲載された。このような事情から，ワルラスはメンガーの挙げたこれらの人物をすでに知っていた。この点については，次の返信におけるワルラスの最後の言葉は信用してよい。その返信は，メンガーから書簡を受け取ってすぐに書かれたものである。

569　ワルラスからメンガーへ

1883年7月2日

拝啓

一昨日，ご著書『国民経済学原理』と，それに添えられた大変親切で，非常に興味深いお手紙を受け取りました。その書物を深く検討しようとしていることを申し上げ，さしあたりお手紙の忠告に急いでお答えしようと思います。

私達は，明らかに同じ問題を提起いたしました。そして明らかに同じ方法，いわば実際にドイツの経済学において支配的な純粋に経験主義の風潮とは全く対立する合理的方法によって（明らかにそれは経験的な出発点を排除しません）それを解決しようと試みました。ご著書が，かなり時間を要したけれども，注目と共感を集めたということからして，ドイツの著名な多くの人々に，私の著作が知らされるということは，それが反応を引き起こす時期も，さほど遠いことではないと思われます。

もしそうなったら，私達が団結することはもっとも肝心なこととなります。私達はそうなって支えあうことになるのです。どうぞそれに至るために，できるだけのことをすることと信じてください。

さしあたって，数学的方法が説明と証明の方法であるか，研究の方法であるか，という問題を議論することを控えたいと思います。どうして研究の数学的方法が，説明の数学的方法ではなく，その逆でもないということをよく理解していないことを告白せねばなりません。しかし，量的関係の

注 (25) Menger, C. Ibid. Erstes Buch, Chap. 1-5.

(26) Carl Mengers Zusatze zu "Grundsätze der Volkswirthshaftslchre" Bibliothek der Hitotubashi Universität Tokio 1961.

(27) W. S. Jevons, *Theory of Political Economy*, 1871 London. Appendix V.

決定が重要である場合には，数学的方法が研究の方法であることを認めているようです。そしてそのことだけで，十分であります。なぜなら価格とそれらの構成要素との関係は，この種の関係であると信じているからであります。そしてまた，私の研究において取り扱った価格決定の問題に数学的方法は完全に適用できるということになりましょう。

しかしこの点については関わらないでおくことにします。科学の哲学には興味を抱いていますし，もし一読されるならば，私の著作の中に方法の問題について，多くの紙数を割いて説明をしたことに気付かれることでしょう。しかし，特に関心を抱いているのは，学問それ自身なのです。掛け離れた立場にいる場合には，学問の最良の方法を抽象的に議論することは確かに都合の良いことです。しかしながら，本質的なことは一つ一つの手段によって具体的な研究をすることなのです。

帰納的方法の演繹的方法に対する優位性等々についてのドイツのいくつかの雑誌論文を読むときに，私はその筆者に言いたくなります。断じて，学問の最良の方法なんかを追い求めることはやめましょう，と。そして，お好きなようにやればいいのです，と。まったく，お好きなようにです。私についていえば，好きなようにそれをしているのです。

私は，説明の方法として数学的方法を採用しました。なぜなら，それを研究の方法として採用したからです。そして考慮する問題を，明らかにしてくれるという単にその理由からもまた，それを採用しました。そのおかげで，せり上げとせり下げのメカニズムによって調整される二つの市場——すなわち企業家が地代・賃金・利潤を，地主・労働者・資本家に支払う生産用役市場と，同じ企業家が同じ地主・労働者・資本家に販売する生産物市場とでは，生産物と生産用役の価格決定のすべての要素を有しています。そして，一般的及び決定的な均衡状態において，生産物と生産用役の交換価値は厳密に，最終的に満足された欲望の強度に比例しています。結果的に，進歩的な社会においては，土地の価値（地代）が次第に増大し，土地の最終的に満足された欲望の強度（地代）が次第に増大し，資本を形成します。それはまた経験によっても確認され，そこから重要な結論を引き出します。

同様に，私の方法を用いて複本位制が可能であること，本位貨幣の価値のある種の相対的安定性が得られることを知りました。さらに，銀の規制された鋳造と結合した金貨幣によって，より大なる安定性を獲得することを知りました。銀行貨幣の発行は，交換の媒介手段を形成し，固定資本の量における増大を可能ならしめますが，流通と信用の二重の危機においてすぐに可能なものではないことを知りました。もし，数学的方法とは別の方法によって，よりよく真理を証明するか，これらの命題の誤りを示してくれるならば，内容に着目し形式を重んじはしないでしょう。

要するに，私は数式を採用するように促された数学者では決してなく，もはや議論の余地のありえない点に向かって，断固とした論理的にしっかりした見解をもつように定められた経済学者なのです。どうして，私達の学問は百年来存在して，貨幣のあるべき制度を述べることができないのでしょう。銀行貨幣の発行は自由であるべきなのか，それとも規制されるべきなのでしょうか。そして私達は，価値や価格の要素がどんなものなのかについてさえ，無知なのでしょうか。これらの問

題に対する解答を探求するのです。そしてそれを，もっとも有益であり，もっとも便利な仕方で定式化することです。それを発見し，定式化することです。

この点についてこそ，貴下のご著書を注意深く拝読しますし，そうしたなら，理解しあえるようにもっとも強い願いをもって私の見解を書くことでしょう。

敬具

L・ワルラス

追伸　私は，ご教示くださった数学を経済学に適用しているすべての著作名を存じています。しかし，その中には読んでいないものが多くあります。

この書簡を見る限り，ワルラスは先のメンガーの書簡の真意を理解しえなかったようである。この点に関して，ワルラスは，正直な告白をしている。特に，ワルラスにとってはメンガーの言う「研究」の方法と「説明」の方法の相違点が理解できなかったのである。ワルラスにとっては，価格決定の問題は量的関係が中心的問題であり，その場合にはメンガーも，数学的方法を適用することが可能であることを認めている，そのことだけで十分だったのである。尚，書簡中のワルラスが自分の著作における「方法の問題について，多くの紙数を割いて説明をした」のは，おそらく『純粋経済学要論』第一編「経済学と社会科学の目的および区分」に散見する断片的な叙述を指すものと思われる。

ワルラスの「純粋経済学」の体系は「交換の理論」「生産の理論」「資本形成の理論」及び「流通および貨幣の理論」の四つの主要問題を含んでいる。「交換の理論」では，生産物市場のみが前提とされ，「生産の理論」ではそれに加えて生産用役市場が前提とされる。それらにおける，市場の一般均衡の状態で生産物と用役の価値が希少性に比例するという原理と，生産物あるいは生産用役の効用あるいは所有量の変動にもとづく希少性の変動による均衡価格の変化の法則は，資本形成の理論においても妥当する。

「資本形成の理論」では，資本形成の機構が一つの問題とされる。この問題がとりあげられるのは経済的進歩に関連した議論においてである。ワルラスは，進歩を人口増加とともに生産物の希少性が減少することであるととらえる。それ故，進歩が可能であるか否かは，人口増加率を上回る生産物の増加が可能であるか否かに依存している。そしてワルラスは，生産函数を不変として，生産要素間の代替による経済的進歩を考察する。

土地の量は増加することができないが，貯蓄がなされる社会では，人口と狭義の資本（人為的な資本のことであり，工業生産物のこと）の量は増加することができる。このとき土地は，相対的に希少となる。それ故，生産費が最小になるように，土地用役の量を少なくし，狭義の資本財の用役量を多くするという条件の下で，新しい均衡を得る。その新しい均衡では，人口及び狭義の資本財の変化する前の均衡と比べて，土地用役の価格（地代）は上昇する，と結論づけられる。

複本位制の理論は，「流通および貨幣の理論」の中で取りあげられる。ワルラスはそこで，厳密に数学的な推論から，単本位論者と複本位論者の論争を解決しようと意図する。さて，金と銀とは鋳造と鋳つぶしとによって，貨幣と固有の意味での商品との間の転化がなされうる商品である。複本位制に関する数学的定式化では，立法者の定める金貨幣と銀貨幣の法定比率を導入することにより，方程式と未知数の数が一致する。ひとたび立法者がこの決定を行えば，裁定の結果，金商品と銀商品との価値の比率はこの法定比率に，金属の貨幣鋳造や貨幣の鋳つぶしを通じて一致する傾向がある。従って，金の価値と銀の価値との比を一定の比に定めることは，小麦とライ麦の価値の比を一定にすることと同様に困難である，という単本位論者の主張は根拠がない。国家が金貨幣と銀貨幣の価値の比率を定めることは可能であり，この比率が金商品の価値と銀商品の価値との間にも間接的に成立するようになる。しかし，複本位論者の，これらの比率に恒等的な同一性があるという主張も誤りである。その同一性は，決して恒等的ではなく，金属の貨幣鋳造または貨幣の鋳つぶしによってしか維持されない。

複本位制は，商品であり貨幣である銀フランの価格が，単に商品でしかない金フランの価格より大であり，また，商品であり貨幣である金フランの価格が，単に商品でしかない銀フランの価格より大であるという条件のもとにおいてのみ行われるのである。

前者の場合は，金商品を金貨幣に変形するのが利益となり，このことは銀貨幣を銀商品に比較して下落させ銀貨幣を銀商品に変形するように仕向けるからである。これらの条件が成り立たない場合は，複本位制は解体して単本位制となる。複本位制が機能している場合，すなわち代替的な貨幣の存在している場合には，複本位貨幣の価値は比較的にある程度の安定性を維持する。しかし，この安定性の確保を自由競争の機構に任せるのではなく，国家が介入してより大なる安定性を得ることは可能である。ワルラスはそこで，複合本位貨幣の価格が変化しないように流通の中に導入されたり流通から引き出されたりする銀貨幣と結合した金単本位制を提唱する。しかしこれは純粋経済学の問題ではなく，応用あるいは実践経済学の問題である。ワルラスは1884年12月に，「銀貨幣の調節による金単本位——ラテン系諸国の貨幣同盟の延長のための貨幣会議に提出される原理」[(28)]で，それを提唱した。それは，1874年に銀貨幣の鋳造が制限され，1878年に完全に中止されたという現状認識に基づいている。

このワルラスの書簡に対するメンガーの返信は，メンガーがこれを受け取ってから，半年以上も経て，差し出される。

602　メンガーからワルラスへ

ウィーン

1884年2月

注 (28) Walras, I., "Monnaie d'or avec billon d'argent régulateur Principe proposé à la conference monetaire internationale pour la prorogation de l'union Latine", *Revue de droit international*, 1884.

拝啓

昨年7月2日のウーシーの消印のある，興味深くもあり，親切なお手紙は，数カ月来，しなければならない返答に対する無言の警告のように，机の上におかれています。なぜまた，返事をさしあげなかったのか。期待に反して出版が遅れてしまった小さな研究報告を同時にお送りしようと思っていたからです。こうして遅れてしまったことをお許し願えれば幸いです。

直接お手紙を引き合いに出すことをお許しください。

貴下は，道理にかなっています。目的に到達することはそれにつながる道を認識することより重要でありますし，ましてや想像上の認識を得ることより，はるかに重要であります。そしてこうであるなら，ましてや方法の名称などは，ますます二次的なものでしかありません。方法が正しいならば，一見したところ私達がその方法をいかに呼び表すかということ，貴下がなさるように数学的と呼ぼうが，お認めになるように合理的と呼ぼうが，あるいは私が要求するように精密的と呼ぼうが，どちらでも同じことです。

経済学は，本質的に研究上追求する方法に従って区分されており，したがって方法は，その下で私達が闘う旗印であります。そうであるならば，どの方法に従うかは全くどうでもよいことではないのです。私達の思想の普及と勝利にとって，この方法をどのような名称で呼び表すかは決してどうでもよいことではないのです。

私達が信奉する方法が，誤ったものであるならば，それは専門家の信用を失くします。しかし正しい方法でさえもそれが間違って呼び表されるならば，私達の書物に対して，多くの人を不信感で満たしたり，あるいは実に迷わしたりするでしょう。したがって，私達が従う方法についての問題は，実際のところ私達がその方法に付与する名称についての問題でさえ，まったく重要性がないということはないのです。さて実際，私は，いわゆる純粋経済学において従うべき方法は，専ら数学的と呼ばれるものでもありえず，専ら合理的と呼ばれるものでもありえないという見解を抱いています。私達が研究するのは単に量的関係であるばかりではなく，経済現象の本質をも研究するのです。しかしいかにしてこの本質 —— 例えば，価値・地代・企業者利潤・分業・複本位制等の本質 ——の認識に数学的方法によって到達するのでしょうか。数学的方法は，たとえそれがその他の点で全く正当であるにせよ，いずれにせよ前述の経済問題の解決にとって妥当なものではないのです。

とにかく，経済現象の法則の決定にとってさえも数学的方法が適当であると認めることは，決してできません。おそらく理論的な経済学の相当数の問題において，このことを証明することができるでしょう。しかし，交換のメカニズムの問題に言及するにとどめることにします。この問題は私もよく知っているように貴下が，1873年以来専念され偉大な成功をおさめてきた問題です。1874年にオルレアンで公けになさった研究報告「交換の理論の数学的原理」は，手元にあります。それはまた，この方針ですっとなされた貴下の出版物のその他すべてについてもあてはまります。

とりわけ専念なさっている問題は，財が財に対して交換されるときに従う法則の決定の問題です。ドイツ人は，財の名の下に，生産手段と同時に，より正確には生産物を，直接的あるいは間接的に

人間の欲望の満足に役に立つすべての物をも理解しています。交易において交換される財数量（それは時間と場所とによって変化する！）は勝手なものなのか，それとも一定の法則に従うものなのでしょうか。それが問題なのです。この法則の探求がご研究の主たる目的であると申しあげたなら，貴下のご研究を正しく理解したことになるでしょうか。もしそうであるとすれば，同時にご研究の目的は，特殊な数学的方法によっては到達しえないということも明白となります。おそらく，ここで問題である多くは，非常に複雑な現象のもっとも単純な要素へ遡ることが必要なのです。——それ故，分析的な方法によって価格現象の究極的な構成要素を確定するのです。そしてさらに，その性質に応じた測度をこれらの要素に当て，この測度を保ちながら，人間の交易の複雑な現象が，単純な要素から導きだされる法則を確立することが必要なのです。

それ故この研究に際して採用する方法は，分析的—総合的あるいは分析的—構成的な方法であり，決して純然たる数学的方法ではないのです。数学は前述の認識の過程において，とりわけ量の測定が重要である場合には重要な役割を果します。しかしながらそれは，一つの補助学としての性格をもつにすぎないのです。

私は，価格の理論によって前述のことを明確にしようと思います。もし，財の交換を支配する法則の認識に到達しようと欲するならば，まず財の交換において人間を導く動機へ，財交換と因果関係にあり，交換者の意思から独立である事実に遡ることが必要です。人間の欲望へ，そして人間にとって欲望の満足のもっている重要性へ遡るのです。個々の経済主体の保有している個々の財数量へ，そして個々の経済主体にとって財の具体的数量がもっている主観的重要性（主観的価値）等々へ，遡らなければなりません。要するに，人間を交換へと至らしめ，交易において人間に影響を及ぼす人間の意思とは独立の最も単純な事実へ遡らなければならないのです。いずれにせよ，そこへ導く方針は，貴下が自らお認めになるように特殊な数学的方法ではありえず，単に分析的な方法でしかないのです。

しかしひとたびこの分析を実行に移したならば，次にすることは，人間が自分の欲望をできる限り最大限に満足しようとする性向によっていかに交換の現象が生じるか。そして最終的に人間の意思から独立した一定の事実関係が，財の価格の水準にいかに影響を与えるかを探究するのです。ここで私達は諸現象の精密的な法則に到達するために，次のような現象を考慮に入れます。すなわち，財の価格に影響を及ぼすこれらの構成要素の測度及び財の価格へのこれらの要素の影響の測度であります。しかしながら，この点についてもまた，数学は補助学の役割しかもっていないこと，私が説明した認識の活動は決して専ら数学的ではなくて，総合的であることも明らかです。

貴下は，私の説明に目新しいことはないことに気付かれるでしょう。私達が内容に関して一致していることは存じています。私は単に数学的方法という表現が，私達の従う研究方法として正当ではない，むしろあまりに限定されたものであり，それは無用に誤解を招くということを示そうと思ったのです。

さて，現在私達の学問を現実に支配している一面的な経験主義を考慮すると，私達の努力はいず

れ，そうでなくてもすでに多くの誤解にさらされているのでありますから，この誤解を自分達の努力に不当なレッテルをはりつけることによって，なおも無用に増大させることは，目的にかなったこととは思われません。おそらく私達が従う方法を，分析的一構成的，分析的一総合的，あるいはよりよく精密的と名付けることが，より正当であるばかりではなく，より的を得ていると思われます。上述の認識手段の名称として，私が受け入れたのはこの最後の表現なのです。

ところで方法は，そしてたとえ完全な方法であっても私達に常に研究方針しか指し示さず，結果は当該の研究者の知的特性であるということを，貴下のように経験をつんだ研究者に申し上げる必要はないでしょう。それ故，たとえ二人の研究者は，たとえ彼らが同一の方法に従うとしても，容易に異なった研究結果に到達することがありえます。貴下はこのことを実際さまざまな点で異なる私達の成果から，容易に察せられることと思います。研究に価値があるかないかの基準は，常に次のことであります。つまり経済現象の真の（現実の生活に応じている）構成的要素を，そして複雑な経済現象が簡単な要素から引きだされる法則を確立することに成功しているかどうかです。分析の方法によっても，現実に対応しないような要素に行きついてしまったり，固有の分析なしに勝手な公理——合理主義的方法においてあまりにもしばしばあることなのですが——から出発する研究者は，たとえ数学をすばらしく巧みに用いても必ず誤謬に陥ります。しかし，認識活動の総合的部分においても，もしそれが理解をともなって扱われないならば，同じことがあてはまるのです。私はすでに1871年の『国民経済学原理』において，示した方法を経済学に適用する試みを企てました。それ以来熱心に，この書物の基本思想をさらに敷衍するつもりである包括的体系に精をだしています。その間に1883年に公けにした私の著作『経済学の方法』において，ドイツ経済学の分野での精密的研究にとって，上述の書物の出版に向けて非常に不利な基盤をきりひらく準備をしようと試みました。若い有能な多くの学者が，同じ方針で活動しており，あえて私は，さしあたりこのことに特別のご注意を傾けていただきたく存じます。

敬具

カール・メンガー

この書簡の冒頭にある，メンガーのワルラスに対する返事が遅れたことの弁明は，文字どおりそのまま受け取るわけにはいかないであろう。メンガーはこの時期，ドイツ歴史学派との「方法論争」を展開しており，さらにワルラスから半年以上前に受け取ったメンガーの方法に対するワルラスの無理解は，メンガーをかなり当惑させたであろう。そして，長い沈黙を破って書かれたこの書簡は，再度メンガーの方法を丁寧に説明しようとしたものである。

そして，メンガーが説明の例にとった交換のメカニズムは，メンガーとワルラスの経済学上の基本的概念についての相違も明らかにしている。すなわち，ワルラスにとって「財」という概念は，希少性を有し，市場で交換されるものを指すのに対して，メンガーのそれよりはより広く「人間の欲望の満足に役に立つものの総体」と規定しているのである。この概念規定の相違は，ワルラスが

市場の存在を前提し，そこで交換される財の価格を問題とするのに対して，メンガーは必ずしも市場を前提とはしていないことの相違に対応する。換言すれば，それはワルラスとメンガーが説明をしようとした経済現象に，異なるものがあることを意味している。

メンガーにとっては，必ずしも希少な物のみが問題とされるのではない。たとえロビンソン・クルーソーのような絶海孤島の住人であっても，彼の欲望の満足に役に立つものの総体は，「財」として経済学の視野の中に入ってくるのである。メンガーにとっての主たる問題は，個々人の欲望の満足に役に立つものに対する，価値評価であったのである。そのような個々人の異なる価値評価が，市場においていかなる価格を成立させるかは，『原理』の第五章に至ってはじめて分析されるのである。ワルラスの経済学が，価格の次元での理論であるのに対して，メンガーの理論体系は，価値と価格の双方の次元を含むものなのである。

このことは，次の書簡にみられるゴッセンに対するメンガーの評価にも通じるものがある。

ゴッセンは1854年の『人間交通の法則ならびにこれより生ずる人間行動の規則の発展』[29]の中で，まず快楽の原理を探求し，そこから交換論を導いて行く。その際，ワルラスと同様にゴッセンは，市場の存在を前提しそこで成立する価格を前提としている。したがって，ゴッセンの体系においては，メンガーのような価値の深い体系的分析は含まれていない。ゴッセンは，生活享楽を最大にするに当たって，従うべき原理が，やがてまた外界の諸事象の価値を規定する原理となる，と言う。そして，絶対的価値はありえず，価値評価にもとづく相対的な価値があるのみである，という。この点でメンガーとゴッセンは類似しているようでもある。しかし，メンガーにとっては，「分析的」方法によって経済現象の真の原因を探りあて，そこから経済現象の生じる経緯を説明することのみが正しい方法である。その方法に従って，例えばメンガーは『原理』の中で，「高次財の価値を規制する法則」について考察している。高次財の価値は，たとえ市場が存在しなくても，最終生産物に対して人間が価値を見いだす限りにおいて，そこから高次財に価値が帰属して決まるというものである。そして，ゴッセンの理論体系では，市場を前提としないこうした帰属の理論は，問題とはなりえなかったのである。そしてこのことは，ゴッセンには「分析的」方法が欠如していたということでもある。その結果，メンガーとゴッセンとでは，説明しようとしている経済問題の領域に相違がみられることとなる。そのことをメンガーは多かれ少なかれ，見てとったのではなかろうか。

さて，上掲のメンガーの書簡に対するワルラスの直接的な返答はない。二人の間の文通は，三年後ワルラスが『貨幣理論』を送ったことに対するメンガーの礼状によって再開されるが，それ以降方法をめぐる実質的な議論はなされず，かれら二人の先駆者の話題などで，穏当に進められる。

注（29） H. Gossen, *Entwicklung der Gesetze der menschlichen Verkehrs und der daraus fliessenden Regeln für menschliches Handellickn*, 1854.
尚，手塚寿郎著『ゴッセン研究』（同文館　東京　1920）をも参照のこと。

765　メンガーからワルラスへ

ウィーン

1887年1月27日

拝啓

ご新著『貨幣理論』を，ご恵送にあずかりまことにありがとうございます。それは，非常に多くの点で特別な興味のあるものです。すでにヨハン・ドルニスによってゴッセンに注意を促されました。貴下が完全にはドイツ語を知らないことを限りなく残念に思います。さもなくば，貴下が，私の著作とゴッセンのそれとを比較できるように，1871年の私の『原理』を喜んでお送り申しあげましたのに。私が確認したように，われわれの二つの本の間には，概念の一致と類似とが，いくつかの点にしか存在せず，決定的な問題においては，存在していません。近いうちに出版される私の『原理』の新版において，このことを明らかにし，すべての点でゴッセンの業績を考慮したいと思います。

この機会に，次のことを貴下にお願いしたく存じます。準備中の文献目録のためのものである同封の本のリストを吟味して，修正と必要な補足を加えていただきたく思います。持続的な興味のある本と論文とは，赤インクで，あるいは目立つ方法で示してあります。

敬具

カール・メンガー

メンガーがゴッセンに言及しているのは，ワルラスの送った『貨幣理論』の序文に，ワルラスが「ベーム・バヴェルク氏の限界効用は，ゴッセンの現存瞬間効用量，ジェヴォンズの最終効用度，そして私の最終的に満足された欲望の強度あるいは希少性と別のものではない」と述べ，数行後で，「私の父とカール・メンガー氏のようにある人達は，日常言語でそれを述べた[30]」と書いているのに対して答えたものであろう。

しかし，メンガーはゴッセンと自分とは，決定的な問題においては異なっていると述べている。メンガーは『原理』の新版ではゴッセンの業績を考慮にいれて，このことを確定すると言っているが，子息の編纂した『原理』第二版の中にゴッセンの名はみあたらない。

769　ワルラスからメンガーへ

ゲオルゲット区3　ローザンヌ

1887年2月2日

拝啓

お渡しくださった私の父と私の二つの著作目録を，完全なものにし，あなたの希望にしたがって持続的な興味を抱かせる本を，赤インクでアンダーラインを施して，用意が整いましたので直ちに

注（30）Walras, L. *Théorie de la monnaie.* p.7.

送ります。印刷された表紙の部分を添えました。そこにはこれらの同じ本が出版の日付の順に従って示されています。ゴッセンに関しては注意して貴下の『原理』第二版において，お書きになることを拝読いたします。しかしながら，今後，彼が明確にそして数学的に私が効用を希少性と呼んだものを最初に理解した人であることを否定することはできないと思われること，そしてそれはベーム・バヴェルク氏の主観的価値あるいは限界効用以外の別のものではないことを申しあげておきます。私達（ジェヴォンズ，貴下と私）は，ゴッセンとは独立に，そしてお互いに独立に同じ概念に到達し，そして多かれ少なかれそれらを利用しました。しかし最終的に，この基本的な点についての優先権はゴッセンに属しています。そして今日再び彼にそのことを認めないのは，生前に彼が認められなかったということによって，私には耐え難いことなのです。私のこの考えはこの点について非常に決定的であり，非常に断固としたものです。正義と慎み深さとは厳格なものであり，さらにそれらは政治的良心でもありうることと思います。また私がお名前を引用し，貴下の業績を活用するあらゆる機会をもつであろうことを期待してください。

〔ドイツ語を不完全にしか知らないことは確かに困ったことであります。しかし，それを乗り越える手段をもっています。私達の用いることができる別のものがあります。フランスの法学部の政治経済学の教授達――彼らとは非常に良好な関係にあります――が，近ごろ自由主義的で進歩的な政治経済学の雑誌[31]を出版するところです。もしかなり入念にご著書の短く簡潔な要約が，フランス語でできるのでしたら，喜んで雑誌にそれを掲載するよう努力いたしましょう。もしご自身でフランス語訳ができるのでしたら，文法的な正しさという点からみて，必要な場合には，それを校正いたします。これははるかに事態を進歩させましょう。近々，雑誌編集委員会のメンバーであるモンペリエの Ch. ジード氏に手紙を書き，もし彼が承諾しましたら，彼が貴下にその旨伝えるようにしましょう。〕

私の高い評価と新鮮な共感とを信じてください。

敬具

レオン・ワルラス

794　ワルラスからメンガーへ

前略

貴下のパンフレットを受け取ったのは，第二回国際統計学会に出席するために，ローマに向けて出発しようとしていたときでした。そこでは，歴史家の（歴史的方法の）過度の要求に対して，機会があれば合理的方法の権利を擁護しようと思っています。途中で読むために，パンフレットを持っていきます。理解しあいやがてシェーンベルクの教科書のそれよりも長く続く運命にある学派の到

注 (31) Revue d'économie politique のこと。これは1871年の1月に発刊されている。

来を希望しましょう。そしてそこでは，貴下はもっとも卓越した発案者となるのです。

草々

レオン・ワルラス

ここで言及されているメンガーのパンフレットとは，1887年の「政治経済学の批判について」[32]を指すものと思われる。そして，二人の間の文通は十年近く後に，メンガーからワルラスに宛てた書簡で終わる。

1277　メンガーからワルラスへ

1896年12月5日

前略

社会的富の分配に関する理論をお送りいただき大変ありがとうございます。ますます関心をもってそれを読みました。特に貴下の社会的理想の具象化されたのを知って，目をみはりました。今一度心からお礼申し上げます。

草々

カール・メンガー

ここでいう社会的富の分配に関する理論とは，ジャッフェが指摘するように，ワルラスの『社会経済学研究』を指すものと思われる。

ワルラスにとって，富の分配を決定するのは，正義の原則にほかならない。ワルラスは，分配されるべき富に二つの種類があるという。すなわち，土地と人格的能力とが，それである。そして両者はともに自然権によって個人に帰属する。そしてそれらの根拠として，ワルラスは正義の原則の名のもとに「条件の平等と地位の不平等」なる命題を提起する。両者はともに，人間が一つの人格であり，理性的かつ自由な被造物であり，等しく自己の責任において目的を追求するものであるという人間認識に基づいている。「条件の平等」とは，自然が人間に対してその努力の対象として提供する資源を，平等に利用しうることを主張するものである。また，人間がその努力に比例して享受することを望むのが「地位の不平等」なる原則である。これらの見地に立ってワルラスは，土地国有化論を展開する。すなわち，「条件の平等」の原則に基づいて，国家は土地の所有者であり，さらにそれを貸与して得られる地代・小作料等の所有者であるという。国家の財政的基盤は，土地の貸与から得られる地代等をもって賄われるべきだという。

さて最後に，ワルラスにとってこのメンガーとの往復書簡は，どのような意味をもっていたかを簡単に述べてこの節を締めくくることとしたい。まず，ワルラスとメンガーの書簡のやり取りが始

注 (32) C. Menger, "*Zur Kritik der Politichen Ökonomie,* Vienna, Holder 1887.

まった1870年代は，ワルラスが自分の『要論』の流布と，それを理解してもらうことに努めた時期である。また，この時期はワルラスが，『要論』の改訂と応用経済学の研究に没頭していた時期でもある。メンガーとの議論を通じて，『要論』の第二版で加えられた実質的な変更はない。ただ，『要論』の決定版で164節に当たる叙述が，第二版では160節に加えられたのみである。[33] そこでは，簡単にメンガーの『原理』を紹介している。「はじめに」でも触れたように，この時期のワルラスは，応用経済学及び社会経済学に関連した論文の執筆に忙しかった。方法といった形式よりも理論の内容を重んじるワルラスにとって，方法の議論に終始するメンガーとの文通は，あまり重要ではなく，二人の関係は疎遠となり，やがて終局を迎えることになったのである。

Ⅲ. ワルラスとベーム・バヴェルクの往復書簡

ベームとワルラスとの間の書簡は，次の二つの時期に大別される。第一は，1886年11月から1887年3月にかけてであり，第二は，1888年8月から1889年5月にかけてである。[34]

この時期のベームの地位を見てみると，次のようである。ベームは，1884年にインスブルック大学の正教授になり，1889年オーストラリア政府の招きで大蔵省参事官になっている。また，ベームは『資本及び資本利子』の第一部『資本利子理論の歴史と批判』を1884年に出版し，第二部『資本の積極的理論』を1889年に出版している。[35] つまり，この時期にベームは，彼の資本理論を具体的に展開する研究を行っていたのである。

（1） 1886年から1887年の書簡

最初の時期の書簡の内容は，送付し合った書物の謝礼ともに，両者が限界効用を出発点とする交換理論における基本的な見解の一致を確認しあうこと，そして彼らの先駆となる人々の研究を教え

注（33） その叙述をあげておく。「ジェヴォンズが初めて『経済学の理論』（1881，2年）を公にした同じ頃に，ウィーン大学教授メンガー氏は『国民経済学原理』を公刊した。これは，私より前に，交換の新しい理論の基礎が，他と独立にそして独創的な形で構成された三番目の著書である。メンガー氏も，われわれと同様に，交換理論を引出す目的で，消費量の増加と共に欲望が逓減するという法則を立てて効用理論を構成している。彼は演繹的方法を用いているが，数学的方法を用いることに反対している。しかし，彼は効用または需要を表すのに，函数や曲線を用いていないとしても，少なくとも算術的な表を用いている。 Walras, L. *Elément* §164（4th ed.）同邦訳書 188-189ページ。

（34） *Correspondence of Léon Walras and Related Papers,* ed by W. Jaffé，書簡743から1,404までの16通。その内ワルラスから7通，ベームから9通である。

（35） Böhm-Bawerk, *Kapital und Kapitalzins,* 2 Bde., 1884-1889.

Ⅰ *Geschichite und Kritik der Kapitalzins-Theorien,* Innsburuck, Wagner, 1884.
Vierte, unveränderte Auflage, Wien Jena, Verlag von Gustav Fishcer 1921.

英訳 *Capital and Interest,* Vol. 1, *History and Critique of Interest Theories,* South Holland, Libertarian Press, 1959.

Ⅱ *Positive Theorie des Kapitales,* Innsburuck, Wagner, 1889.
Vierte, unveränderte Auflage, Wien Jena, Verlag von Gustav Fishcer 1921.

英訳 *Positive Theory of Capital,* South Holland, Libertarian Press, 1959.

合うことである。しかし，ベームによって財の分割可能性についての扱いの相違が指摘され，両者の間で議論となっている。ただ，この点に関してワルラスとベームでは微妙な議論のすれ違いが見られる。これらのことを，順に手紙を追って見ていくことにする。まず，ベームから送られたパンフレットに対してワルラスが返事を書くことから二人の文通が始まる。二人が限界効用の学説において一致していることを確認し，友好的に互いを評価しているのが窺い知れる。

743　ワルラスからベームへ

ローザンヌ

1886年11月18日

拝啓

旅から戻って数週間経って貴下の『経済的財価値の基礎理論』[36]と題されたパンフレットを目にしました。そして，すぐに一見して，これの非常な重要性を理解したので，同僚のセルタン教授の援助によって完全で注意深い講義を試みました。やがて印刷に付し，出版される運びのパンフレットの序文でそれを記録するつもりですが，近いうちに印刷されるそれをもし今お送り申し上げるべきでないとしたら，私はここでその講義によって思いついた考えをいくつか述べたいと思います。

その序文において，できるだけ完全に，貴下がおっしゃるような「限界効用の新学説を交換法則の構築のために利用している」経済学者の名前と著作とを載せたいと思っています。そしてそのために，以下のことについてお尋ねしたく，簡単にお答えしていただきたく存じます。

すなわち，貴下が引用しているヴィーザー氏とヴォルフ氏とは86-87年の大学年鑑にあらわれる，プラハ大学教授，ヴィーザーとチューリッヒのJ・ヴォルフ博士のことでしょうか。

ヴィーザーの著作と出版地はどこでしょうか。ヴォルフ氏の著作と出版地と出版の日付は何でしょうか。そして，最後にビアソン氏の著作の初版の出版の日付と場所と，それから正確な表題は何でしょうか。

今日遠慮なく始めました文通が長く続くことを期待しています。

敬具

レオン・ワルラス

747　ベームからワルラスへ

インスブルック，ミュラー通り11

1886年11月20日

拝啓

注 (36) Böhm-Bawerk, "Grundzüge der Theorie des wirtschaftlichen Güterwerts", 1886; reprinted from Conrad's *Jahrbücher für Nationalökonomic und Statistik*, 1886, New Sories., vol. 13, pp. 1-88 and pp. 477-541.

ドイツ語でお返事を書くのをお許し下さい。貴下のお手紙を完全によく読み取ることはできるけれども，残念ながら自分の言いたいことを十分表現できるほどフランス語がうまくないのです。それゆえ，今月18日のご親切なお手紙にどれほど喜んだか，そして私の専門分野でこれほど有名な学者と文通するのを，どれほど光栄に思っているかを，ドイツ語で申し上げなくてはなりません。

ご質問に，あえて以下をもってお答えしましょう。

ヴィーザーとは，プラハの博士であるフリードリッヒ・フォン・ヴィーザーのことであります。彼の本のフルタイトルは，以下のとおりです：『経済価値の 起源と 主要法則』ウィーン，1884，アルフレッドヘルダー出版。(37)

ジュリウス・ヴォルフ博士はチューリッヒ大学の講師であります。彼の論文は以下のとおりです。「価値に関する学説」，『総合的国家学雑誌』，第42巻（チュービンゲン　ラウプシェ出版，1886）(38)

N. G. ピアソンの著作は，次のとおりです。(39)

1) *Leerboek der Staathuishoundkunde.* Eerse Deel（第一部）Haarlem, De Erven F. Bohn, 1884.

2) *Grondbeginselen der Staanthuishoundkundo.* Twoodo Druk（第二版）Haarlom, Do Ervon F. Bohn, 1886.

なお，ヴォルフは今のところまだ「限界効用」の学説の支持者ではないということを述べ，ここに真実なる尊敬の念をもって筆を置きたいと思います。

敬具

ベーム・バヴェルク

770　ベームからワルラスへ

インスブルック，2

1887年2月2日

拝啓

まず，ご著書『貨幣理論』(40)をご恵送くださったことに，心から感謝を申し上げたいと思います。

注 (37) Friedrich Freiherr von Wieser (1851-1926).

(38) Julies Wolf (1826-1937)，ドイツのエコノミスト，チューリッヒ，ブレスローそしてベルリンで教鞭をとった。多産な著述家で次のような著書がある。*Sozialismus and kapitalistische Gesellschaftsordnung* (1892), *Nationalökonomie als exakte Wissenschaft* (1909).

(39) Nicolaas Gerad Pierson (1839-1909)，経済学者，銀行家，政治家，貨幣及び財政の専門家そして複本位制の提唱者。アムステルダムの経済学教授（1877-84），オランダ銀行総裁（1884-91），大蔵大臣（1891-94），総理大臣，大蔵大臣兼任（1897-1901）。

(40) Léon Walras "Théorie de la Monnaie" Paris, *Revue scientifique,* April 10 and 17, 1886, series 3, vol. 11, nos 15 and 16, pp. 449-457, pp. 493-500. 序文の付いたものが，別にでている。Paris, *Bureau de revues,* 1886, pp. 24. 序文と第三部を含む完全なものは，次のとおりの出版物となっている。*Theorie de la monnaie,* par Léon Walras, Professcur d'économie politique à l'Acadomie de Lausanne, Associè de l'Institut international de Statistique, Lausanne, Corbaz; Paris, Larose & Forcel: Leibzig, Duncker & Humblot, 1886.

同時に，貴下が金銀両本位制の考えを展開する際の明晰さ，鋭さそしてエレガントさに対して非常に驚嘆している次第であります。貴下は，この考えの正しさを私に充分確信させました。しかし，次のような問題が若干の疑問として残るのです。つまり，国際的な連盟の機構は，貨幣準備の調節というやっかいな仕事を果たすために，充分信頼がおけるかどうかということです。

最大の関心をもって，貴下が，ご親切にも私と私の価値についての研究に繰返し言及して下さった序文を読みました。そして，二三のお言葉から，私の研究の成立についてそして限界効用の概念の（あるいは，私達ならほかの呼び名でこの概念を言い表すのですが）先駆者と私の関係について，より正確に私が表明することを望んでおられるのだと気がつきました。

ゴッセン[41]の本を，今までうわさには聞いておりますが，この非常に稀なものとなった本をまだ読んでおりません。同様に私にとって，自分の研究の作成のときに貴下の著書のうち最も新しい二冊（ローザンヌ1885，パリ1886）があっただけで，しかもほんのちょっと知っていただけです[42]。ようやく最近，印刷物として貴下の『要論』と「貨幣理論」を知るようになりました。こういう訳で，私はほんのわずかしか脚注のなかでこれらの著作を引合いに出せなかったのです。これにたいして，（12ページ脚注4で言及したように）私は自分の著作の主要な根本思想を，1871年に出版されたC・メンガーの原理から借用しました[43]。私は，自分の研究を，総じておそらく若干の改善と補足をほどこし，メンガーの価値理論をより正確に関連づけて仕上げたものにすぎないとみなしています。私の著作を仕上げるに際して，二つの動機が私を導きました。第一に，一つの学説を普及させるための力となりたいという願いであります。この学説を私はとうに正しいものであると認識していたにもかかわらず，これにたいしてドイツの読者は理解しがたい頑固さで拒否してきたのです。そして第二に，資本理論の基礎を作り上げる必要性です。その作成に私はこの数年たずさわってきました。というのも，私は貴下と完全に次のことで一致しているからです。つまり「希少性」についてのあるいは「限界効用」についての学説は，あらゆる経済問題の出発点とならなくてはならないということです。

限界効用の学説は，三度のみならず四度も独自に発見されるという注目に値する運命を有していたように私には思われます。すなわち，初めに忘れられたゴッセンによって，それからほとんど同時にそしていずれにせよ全く独立に，貴下，ジェヴォンズ[44]そしてメンガーによってです。そして，メンガー理論の完成という私の仕事が貴下の著作から独立になされたにもかかわらず，貴下が見出された結果とほとんど一致しており，同一のものであると宣言なさいますなら，貴下の正しさがとくに強固に証明されたことになります。

注 (41) Hermann Heinrich Gossen, *Entwicklung der Gesetze des menschlichen Verkehrs, und der daraus fliessenden Regeln für menschliches Handeln,* Brauschweig, 1854.

(42) "D'une méthode de regularisation de la variation de valeur de la monnaie", read before the Société Vaudoise des sciences naturelles on May 6, 1885. *Bulletin de la Société Vaudoise de Sciences Naturelles,* August 1885, series 2, vol. 21, No. 92, pp. 71-92. および (41) の *Revue scientifique* の抜粋のこと。

(43) C. Menger (1840-1921), *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre,* Vienna Braumüller 1871.

(44) W. S. Jevons (1835-1882), *The Theory of Political Economy,* London & N. Y., 1871.

この機会に，なお一つの点を指摘したいのです。私はようやく後になってから気がついたのですが，私たちの理論には，非常に矛盾している点があるように思われるということです。しかし，それは思うに，見かけ上のものにすぎないのであります。貴下は，次のことを強調して説かれます。「価格は平均希少性の比率に等しい」，つまり，もしその他の状況が同じで，交換者の一人にとっての希少性が変化するなら，価格もまた変化しなくてはならないということです。(45)

私は，反対に次のように主張します。価格は，主観的評価の平均に等しくないのです。そして，価格が必ずしも変化せずに，売手や買い手の価値評価にかなり変化が生じることがありうるのです。私達は表面上非常に矛盾しているようですが，にもかかわらず両者共正しいと思われます。あなたの定式化は，財が無限小まで細分化できるという仮定のもとでは正しいのです。私のは，実際上かなり意義をもってしばしば該当するような前提，つまり財が増加するにつれ「希少性」は連続的曲線ではなく，段階的曲線で減少するという前提のもとで可能であります。

敬具

ベーム・バヴェルク

777　ワルラスからベームへ

ローザンヌ

1887年2月13日

拝啓

この二月のすばらしいお手紙は，私がある保険会社の四年ごとの決算書の作成のための計算に追われ，その上体調が思わしくないときに届けられました。そういう訳で，もっと早くお返事を差し上げることができませんでした。しかし，私はこの文通が私たちの間で続けられることを望んでいますし，できるだけそして最良の環境のもとでそうすることを願っています。

私の貨幣理論の原則に賛成して下さいまして，心から喜んでいます。普遍的な貨幣統合のメカニズムを作用させる可能性に関する貴下の疑問については，私はますます意見をほぼ共有するものと思っています。しかし，どの点まで，そしていかなる限界において実行可能かそうではないかに気を配ることは，政治家に任せて，我々科学に取り組む人々は，理論を定めることに専念すべきであるというのが私の考えです。

すばらしいご著書のなかで，引用なさったり書き落されたりした著者名について，私に喜んで提供して下さる説明は，私がすでに正確に示したものですが，全面的に申し分のない説明です。どんなに望み，努力をしたとしても，私の心を占めている問題の学問状況を正確に知ることができません。いかにすればこの点について，他の人たちと要求しあうことができるのでしょう。

注 (45) Léon Walras, *Éléments d'économie politique pure,* 1874-77, 久武雅夫訳『純粋経済学要論』岩波書店，1983, pp. 152-153. 英訳 W. Jaffé, *Elements of pure Economics,* 1954, pp. 176-177. 平均希少性とは各人のある財に対する限界効用の平均のことである。もし，すべての個人についてすべての財の限界効用の比が価格に等しいならば，平均希少性の比も価格に等しくなる。

私は同僚で友人のセレタン氏[46]に，貴下の著作の最初の部分をすべて翻訳させました。彼は同様に最初の日に二番目の部分も翻訳しました。そして，私はカール・メンガー氏の著作も同様に調べるために手筈を整えたのです。

貴下が通じている事柄にとりかかることを手助けするために，私がゴッセンのために割いた記述を貴下に送ります。そしてもしお持ちの私の著作のリストを教えて下されば，それ以外のものも喜んでお送り致します。

私の返答がおそらく最も望まれているのは，お手紙の最後の点についてでありましょう。しかしそれについて一言だけ申し上げたいと思います。価格の希少性（最終欲望満足の強さ）に対する比例性の条件は，あるいはもっとはっきり言えば，希少性の価格に対する比例性は，それぞれの交換者にとって彼らの欲望の最大満足の，あるいは有効効用最大の条件なのです。結果として，どの点までこの比例性は効用と数量のある種の条件に応じて確立され，そしてこれらの条件の変化に対して維持されるのかを知る問題は，どの点まで私達各自が，最大満足あるいは効用の最大化を獲得し，維持できるかを知る問題に帰着されるのです。もし私が貴下をよく理解しているならば，経済均衡の研究のこの操作において互いにかなり対立する部分があることと思って下さってよろしいです。その点について充分尽くした議論も可能かと思います。今日のところは二つの観察だけに留めておきます。まず第一は（クールノーがそれについて指摘したように）諸個人においては不連続である需要と供給の変化は大数の法則によって全体としての需要と供給のかなり連続な変化にたいして正当な理由を与えてくれます。第二はたとえ諸個人が多かれ少なかれ均衡に達したり，留まることができなくても，この自由競争の仮定において，この自由競争が仮定の状態から厳然とした原理へと移行するためには，彼らが相互に均衡するかどうかだけで充分なのです。[47]

敬具

レオン・ワルラス

770と777の手紙からわかるように，ベームは効用曲線が連続的ではなく，段階的曲線になるケー

注 (46) チャール　セルタン(1815-95)，エドワード　セルタンの兄弟。ローザンヌアカデミーの哲学教授。

(47) 自由競争が仮定から原理となるということについて，『要論』のなかに次のような叙述がある。「我々は純粋科学の観点にたって，これまで自由競争を一つの事実としてあるいはむしろ仮説として認めることが必要であったし，またそうして来たのである。なぜなら，これを現実に見出すかどうかはそれほど重要ではないからである。厳密に言えばこれを概念的に構成すればそれで十分である。我々はこれを与件としてその性質，原因，結果を研究した。今その結果を要約すれば，一定の制約のもとで効用の最大化が得られることが明らかになったことである。これによって，この事実は有益な原理または準則となるのであって，これを農業，工業，商業に具体的に適用することを求めることが残された仕事である。」Léon Walras, *Éléments d'économie politique pure,* 1874-77, 久武雅夫訳『純粋経済学要論』岩波書店，1983, p. 251. 英訳 W. Jaffé *Elements of pure Economics,* 1954, pp. 255.

引用からもわかるように，ワルラスにとって仮説と現実との対応関係は重要でない。仮説から概念的に構成されるところの構成物は，原理として確立されるのである。一方ワルラスの経済学の全体系において「原理」という概念は一つのキーとなる概念である。彼の応用経済学や社会経済学を含めて考えると，「原理」は理論的構成物であるばかりではなく政策目標であった。

スを自分が扱っているのにたいし，ワルラスは連続的なケースを扱っていると述べ，両者の相違を指摘する。そして，その違いが財の無限小までの細分可能性を仮定するか否かに由来しているとする。これに対しワルラスは，大数の法則を用いれば，連続的な効用曲線が描けるという。しかし，財の分割可能性の問題と大数の法則は無関係であることにワルラスは気付いていない。財がある離散的な単位数でのみ売買され，各人の効用曲線が不連続な階段で描かれるならば，何人の効用曲線を集計しようとも連続な効用曲線が得られることにはならないのである。ベームは自分の意図が伝わらなかったことを知り，再び手紙でこの点を詳しく説明するのである。

782　ベームからワルラスへ

インスブルック

1887年2月23日

拝啓

今月13日づけの価値あるそして示唆に富むお手紙と「無名の経済学者」についての同封のものに対して，心から感謝したいと思います。多大な関心をもって，また同時に注目に値する人物の不幸な運命に深く感動しながらお手紙を読みました。

ご親切なご要望に応じて，所有する貴下の著作のリストを作ります。最近になってからご恵送下さった『貨幣理論』は別として，『経済学要論』(ローザンヌ1874-1877)，『社会的富の数学的理論』(ローザンヌ1883)，『貨幣価値の変化を規制する方法について』(ヴォー州自然学術協会　ローザンヌ1885)，そして「貨幣理論」(サイエンティフィック・レヴューの抜粋　パリ1886)。このリストで全部をつくしていると思います。(48)

先日，思うに私達の見解がその定式化ほど食い違っていないような点に，非常に簡単にまたなお一層悪いことに不明確な形で言及しました。そこで今回は，これについての私の考えをいくらか詳細に叙述しようと思います。

私が述べた相違は主に自分たちの式を展開させるとき，出発点となる事実的前提における相違に基づいていると思います。貴下は，(『貨幣理論』p. 31)「単純化するために，すべての商品が無限小の量で消費できること」を仮定しています。このような仮定のもとでは，次のようになります。ある無限に細分可能な財の最小の一単位の価格が，たとえば1fr. であるならば，そして一人の買い手にとって彼が買う最初の一単位は10fr. の希少性を有しているとすると，彼は最初の一単位を買って満足せず，彼にとって9fr. の希少性のある第二単位を買うでありましょう。そして希少性が 8 fr. で

注 (48)　*Théorie de la monnaie*, par Léon Walras, Professeur d'économie politique à l'Académie de Lausanne, Associé de l'Institut international de Statistique, Lausanne, Corbaz; Paris, Larose & Forcel: Leibzig, Duncker & Humblot, 1886. Léon Walras, *Éléments d'économie politique pure*, Lausanne, L. Corbaz, 1874-77. *Théorie Mathématique de la Richesse Social*, Lausanne: corbaz, Paris: Guillaumin, Rome: Ermano Loescher, Leipzig: Duncker & Humblot, 1883. "D'une méthode de régularisation de la variation de valeur de la monnaie", 1885, (9) 参照。"Théorie de la Monnaie", Paris, *Revue scientifique*, April 10 and 17, 1886.

ある第三単位などを次々と買い，彼が買う最後の一単位は彼にとってなおも1fr.の希少性でありましょう。もう一人の買い手は，自分にとって第一番目の単位は，希少性が5fr.であるので，同様におそらく五単位買うでありましょう。その希少性は，減少数列5，4，3，2，1によって表されるでしょう。第三番目の人は，三単位を希少性3，2，1，で買い，最後に第四番目の人は，最初の一単位の希少性が1fr.しかなく，一単位のみ買うのです。この仮定のもとで，すべての買い手が買う最後の一単位の希少性は，各人にとって同一の金額であります。つまりそれは，各人にとって1fr.であります。そしてこの前提のもとでは，貴下が希少性のどんな変化も価格の変化をもたらさなくてはならないと説明なさいますのは，全く正しかったのです。

これに対して，私の説明の基盤に私は無限には分割できないような種類の財を選んでいます。私の一頭目の馬の希少性はおそらく300fr.ということがありましょう。私が使用することも，置くべき厩もない二頭目にたいして希少性は100fr.しかないとします。300fr.と100fr.の間の段階は，総べてないのであります。今，一頭の馬の市場価格が，210fr.とすると，希少性が300fr.である一頭を買うでしょう。最初の一頭の希少性が400fr.，二頭目の希少性が220fr.三頭目が200fr.の他の人は，二頭を買うでありましょう。第一頭目が希少性210fr.しかない第三の人は一頭しか買わないでしょう。ここでは，最後に買われた馬の希少性は各人にとって異なるのです。私にとっては300fr.二番目の人にとっては220fr.，三番目の人にとっては210fr.です。そのような場合は，私の著書で説明したように，最後の買い手の希少性，ないしは主観的価値評価だけが問題で，残りの買い手の希少性に生ずる変化は価格を変化させません。私の買う馬の希少性が私にとってちょうど300fr.あるいは400fr.あるいはまた210fr.であるかどうかは，210fr.という価格のもとで生じる需要と供給の均衡にとって全く同じことであります。

私が例として選んだ馬と同じように，さらに数多くの財が，このような関係を充たすと考えてよいでありましょう。それに加えて，現実には無限に分割できる多くの財は，もしそれに対する需要がかなり固定しているならば同じようになるでしょう。例えば，私は日に二度一杯のコーヒーを飲むが，たとえコーヒーの価格が半分に下がってもそれ以上飲んだり買ったりしないでありましょう。しかしこうであるならば，私が買う最後のキログラムのコーヒーが私にたいして有する希少性の変化も，また価格の変化を明らかに引き起こさないのであります。――私が，「最後の買い手」でないかぎりつまり最後のキログラムが，私にとってよりもより少ない希少性を有する買い手がなお存在するかぎりであります。――

自分の書物を完成させるときまでに，貴下の理論を既に正確に知っていたならば，価格法則の展開に別の例を選ぶか，あるいはもっとよく二つの前提ないしは二つの種類の財に対する価格法則を展開し，それによってこの点における貴下の理論との矛盾の外見を避けられたでしょう。

同時に『資本理論の歴史と批判』について私が書いた古い著作をお送りしたいと思います。(49) なるほどこの本が貴下の関心を全面的に呼び覚ますことができると信じるほど私は厚かましくはないの

注 (49) *I Geschichte und Kritik der Kapitalzins-Theorien*, Innsburuck, Wagner, 1884.

ですが，しかしおそらく貴下は少なくとも一，二の貴下にとって無用ではない注目点を見出すでしょう。

もちろん一つの欠落を見出されることと思います。私は，貴下の注目に値する利子論に対する態度を明らかにしていなかったのであります。やはり当時貴下のきわだった著作を私はまだ知りませんでした。

『要論』の第二版の出版は間近でしょうか。[50] 今日はお手間とお時間をとても長くとらせましたことをお許し下さい。

敬具

ベーム・バヴェルク

ベームは，馬市のケースを用いて財が無限小まで分割できないときに，一人の交換主体の効用の変化が必ずしも価格の変化をもたらさないということを，説明した。これに対してワルラスは，次の手紙で再び大数の法則を適用すればという留保条件をつけている。そして，『要論』の第二版では，この議論を完全なものにして出版することを約している。ところで，838の手紙からもわかるように，ワルラスは『要論』の第二版では，82節，83節において実際，効用曲線が不連続な場合を扱っている。[51] ここでは大数の法則の適用ということについてのワルラスの誤解は解消されていると言ってよいだろう。ワルラスの『要論』第二版のこの部分に関する改訂は，ベームとの文通からなされたものと言ってよいことになる。しかし，ワルラスは『要論』の中では，ベームに負うていることを明示していない。

788　ワルラスからベームへ

ローザンヌ

1887年3月5日

拝啓

不連続な効用曲線をもつ商品の場合における最大満足の条件に関する貴下の説明を注意深く読みました。そして貴下に次のことを述べなければならないのです。

すなわち，問題の提示方法について行わなければならないいくつかの詳細な考察をすることを保留し，また私が話をした大数の法則の適用をも保留すれば，この場合においては希少性のどんな変化も必ずしも価格の変化をもたらすわけではないという点について，貴下に同意します。

『要論』第二版を出版するときには，いつもこの意味における交換の理論を完全なものにしよう

注（50）Léon Walras, *Eléments d'économie politique pure*, 2ed., 1889, F. Rouge ; Lausanne ; Guillaumin, Paris and Duncker & Humblot, Leipzig.

（51）決定版における該当個所は以下のとおり。Léon Walras, *Éléments d'économie politique pure*, 1874-77, 久武雅夫訳『純粋経済学要論』岩波書店，1983, pp. 88-92. 英訳 W. Jaffé, *Elements of pure Economics*, 1954, pp. 127-131.

と意図しています。しかし，それは疑いもなく今から一年ないしは二年はかかることになりましょう。貴下の『資本利子理論の歴史と批判』を送って下さったことを大変感謝しています。これこそは，私自身の考えを決定的に基礎づけるためにせよ，他人の考えを正確に理解するためにせよ限りなく有用な本なのです。貴下がおっしゃったことから判断致しますに，私が純粋政治経済学の自分の理論を説明した本を貴下はすべてお持ちであると思われます。そこで，価値の起源の基礎の非常に根本的な問題についての，非常に珍しくなった私の父の本を一部送らせていただきます。(52)

敬具

レオン・ワルラス

791　ベームからワルラスへ

インスブルック，ミュラー通り11

1887年3月9日

拝啓

貴下のお父さまの大変ご立派な著書をお送り下さって，思いがけない喜びでした。すぐその本に目を通し，二三の章を詳しく読んでみました。お手紙でおっしゃるような学問的に風変わりなものであるだけでなく，いずれにせよ当時の文献上第一級の地位を占める国民経済学についての才知豊かで，独創的な著作の一つであるとわかりました。「希少性」の価値に対する影響，効用の「強度」と「範囲」についての説明，また，リカード，セイ，ガリアーニなどについてのすばらしい批評は，著者の才知と独創性の輝かしい証明になっています。

価値あるおくりものに対して，心からお礼を申し上げたいと存じます。

敬具

ベーム・バヴェルク

（2） 資本理論についての書簡（1888年-1889年）

この時期にワルラスは，『要論』の第二版の印刷に追われており，一方ベームも『資本の積極的理論』の原稿が最後まで仕上がらないうちに，印刷が始まっている。約二年前に両者の間で確認された交換理論における見解のおおよその一致に基づいて，ワルラスは『要論』の第二版の見本刷りを送ったついでに資本理論についても同意を促していることがわかる。ところが，ベームは資本理論にたいして見解の相違を表明し，二か月後の11月に自らの『資本の積極的理論』の途中までのゲラ刷りをワルラスに送る。そして1月に最後の部分を含めたベームの原稿と『政治経済雑誌』に掲載されたベームの要約がワルラスの手元に届き，ワルラスはベームの資本理論を5月までかかって検討した結果，ワルラスからも見解の相違が表明される。両者は見解の統一をみないまま実質的な

注（52） Auguste Walras, *De La nature de la richesse et de l'origine de la valeur*, Paris, Johanneau, 1831.

議論を取り交わすことはその後なかった。

838　ワルラスからベームへ

1888年8月1日

拝啓

『純粋経済学要論』第二版を非常に念入りに準備することに一年近く前から忙殺されていますが，交換の理論を含む8ページ分を，謹んで貴下にお送り申し上げます。その際，特に貴下のご注意を加筆と修正をほどこした次の節に促したく思います。すなわち，82節及び83節（欲望曲線が不連続な場合の最大満足の理論），110節から114節まで（一般均衡理論），132節（希少性の表），160節（ゴッセン及びジェヴォンズの理論の批判とメンガーの理論の説明です。[53]）これら四つの節のうち第一番目と最後の三つに特にご関心をもたれることと思います。

生産の理論と資本化の理論がなされるべきにして，印刷に付されるやすぐに今から二，三か月のうちに10ページの仮綴本をお送りしたいと思っています。

第一にのものにおいて私は初版において行ったように生産物の価格から生産者用役の価格，つまり小作料，俸給及び利子を引き出すことをしています。第二版では1877年にもしたように純収益率を用役の価格から引き出しています。いかなるものかご覧下さい。

消費に対して収益がいくらか超過しているか，いくらか不足しているのであれば，この超過分は，必然的に新しい動産資本の建設に振り分けられます。それはあたかも，用役の価格（先の理論によって決定される）の資本の価格に対する関係が新しい動産資本のあらゆる種類に対しても同じであるようにです。

この関係が知られれば，<純>収益率こそが一度決定されるや現存の動産資本と不動産資本の価格を決定するのです。

私が以前に示したものと似たほんのわずかな変更によってこれらのすべての決定は私の第二版では非常に明快になっていることにお気付きになるでしょう。

私の考えでは貴下と私は生産物の価格と用役の価格の決定の理論について完全に同意しているように思われます。

私達は収益率の<用役の価格の資本の価格に対する明らかなる関係の>決定の理論についても同意できるはずです。そして，この一致はこの学問の進歩に対して顕著な決定的出来事となるでしょう。また，フランス語圏で，貴下の著作が知られるようにできるだけ用いることができる範囲でこれを取り上げたいと思います。

もし貴下がこの点について私と信条を同じくするのであれば，貴下がドイツ語圏の経済学者たち

注（53）Léon Walras, *Éléments d'économie politique pure*, 1874-77，久武雅夫訳『純粋経済学要論』岩波書店，1983，英訳 W. Jaffé, *Elements of pure Economics*, 1954，対応する決定版の節を挙げておく。83-84節，111-115節，134節，162-164節。

に，機会がありましたら私のものをお示し下さることを期待しています。

敬具

レオン・ワルラス

ワルラスにおける資本概念をここに整理しておこう。「すべての耐久財，すべての種類の消費し尽くすことができないかまたは長い間にしか消費しつくされないような社会的富，人が最初に消費してもなお残存する，いわば一回以上役立つところの有限の効用を」資本一般とする。[54] これにたいして，「すべての消耗財，ただちに消費されるすべての種類の社会的富，一度使用すれば消滅する，言い換えれば一回しか役に立たないすべての希少なものを」収入という。この収入と資本という概念を用いて，社会的富の全体を四つの範疇に分ける。[55] その内三つが資本であり，一つが収入である。第一が土地資本であり，第二が人的資本であり，第三が動産資本である。動産資本は土地及び人的資本以外のすべての富である。これらの資本の用役をそれぞれ，土地用役，人的用役，動産用役といい，用役は収入をもたらす。さらに第四の範疇は，消費の目的物と生産のための原料となる収入である。[56]

841　ベームからワルラスへ

ロイグ，ポスト，セント，ギルゲン，ザルツブルグ

1888年8月7日

拝啓

貴下の『要論』の第二版の見本刷りをご恵送下さいましてありがとう存じます。

私達は実際，最も重要な基盤となる学説において全く同じ意見であります。私達は価値の理論においてそうだし，（あまり本質的ではない一つのことを除いては）交換の理論においてもそうであるし，生産物の価値とその生産手段の価値の関係についての非常に重要な学説においてもそうである。ただ，資本理論において，私達はかなり違っていると思います。非常に卓越した一人の学者に対して，あえて私のかけ離れた見解を表明することを，お許し下さりたいと存じます。

第一に，貴下の資本概念の考え方に既に賛成できません。第二に，なおずっとより重要なことなのですが，貴下においても，「資本の生産用役」という言葉を用いるのに，セイやシェッフェルやヘルマンにおいてと同様，ある類似の二義性が，あると思います。（私の『資本理論の歴史と批判』p. 229ff. 特に274と275を見よ）そしてその結果，貴下の理論は，純粋な資本利子に対する真の解明を与えていないように思われます。[57]

私は自分の資本理論の印刷に取りかかっています。その印刷が充分進展したらすぐ貴下に一部お

注（54）同書，p. 195，ibid., p. 212.
（55）同書，p. 197，ibid., p. 214.
（56）同書，pp. 197-201，ibid., p. 214-217.

送り申し上げます。十月中にできればと思っています。

しかし，資本利子の基礎づけにおいて，私がかりに貴下とかけ離れているとしても，資本利子の高さについて私が打ち立てた法則は，貴下のものといくらか似ているでしょう。私達は出発点と目標点をかなり共通に有しているように見えます。ただ目標へ向かう道程の途中の部分がかけ離れているようです。(58)

貴下の第二版の続きを多大な期待をもって待ち受けております。当然のことながら私は，ドイツ語の読者が卓越した功績に注意を傾けるよう，あらゆる機会をとらえるでありましょう。その功績は，貴下が我々の学問の重大な根本学説の発見をめぐって獲得したものであります。そして，私は，貴下が繰返し私の研究に言及してくださる親切な注釈に心から感謝しています。

敬具

ベーム・バヴェルク

ベームは資本を「財の獲得のための手段として役立つ一群の生産物」としている。特に，迂回生産の様々な段階において生産される中間生産物の総体である。資本の本質は生産期間の延長を可能にすることである。手紙のなかで述べられているように，ベームはワルラスの資本の概念に反対している。『資本の積極的理論』において，ベームはセイを批判するのと同様に，ワルラスを用役論者と呼んで批判する。耐久財を資本とみなし，消耗財を所得と考え，耐久財がもたらす資本用役のみをもっぱら考察の対象とすることが批判されている。ベームによれば，耐久財であるか否かという物理的性質が資本の重要な本質ではなく，将来に向けてある財を獲得するためにあらかじめ財が用いられる場合の時間的な配分の仕方が，資本を規定する。(59)

857　ベームからワルラスへ

インスブルック

注 (57) Böhm-Bawerk, *Kapital und Kapitalzins*, 2 Bde., 1884-1889.

I *Geschichite und Kritik der Kapitalzins-Theorien*, Innsburuck, Wagner, 1884. Vierte, unveränderte Auflage, Wien Jena, Verlag von Gustav Fishcer 1921, pp. 171-240. 英訳 *Capital and Interest*, Vol. 1, *History and Critique of Interest Theories*, South Holland, Libertarian Press, 1959, pp. 122-177. 後に付加された付録，「用役論者」のなかで，ワルラスが言及されている。「ワルラスは，既に以前 J. B. セイを思わせる用役理論の定式化を全面に押し立てていたが，後になってもそれに固執している。」 *I Geschichite und Kritik der Kapitalzins-Theorien*, 1921, pp. 464-480. 英訳，pp. 365-378.

(58) 英訳 *Positive Theory ef Capital*, p. 396, 脚注 1，「……ここに挙げられた点において，私は完全にワルラスに賛成する。だが，彼はチューネンのように本質的に間違った利子理論から出発している。が，彼は正しくそしてすばらしい科学的体裁を伴って多くの細部に到達できている。まもなく出版される彼の『経済学要論』の第二版の校正刷りを，親切にも私に見せて下さったのだが，この問題について多くの説得力のあるそして注目すべき議論が展開されていた。ただ，それらが面倒で難しい数学で書かれていたことが残念である。経済学とは全く数学であるという考えは，その卓越した経済学者が言ったことであるが，それに私は決して賛成することができない。」

(59) *II Positive Theorie des Kapitales*, 1921, p. 32. 英訳 *Positive Theory of Capital*, p. 38.

1888年11月23日

拝啓

さしあたり，私の『資本の理論』の最初の20全紙をお送りしたいと存じます。その本の残りを二三週間のうちに送付できればと思っています。

お送りしたものの内容は次のようなものです。

Ⅰ編　資本の概念と本質（p.1-77）

Ⅱ編　生産器具としての資本（p.78-134）

Ⅲ編（最終編）　五節あってその中に資本利子の理論が含まれている。そのうち，第一節と二節は，価値と価格についての一般理論を扱い，第三節は（全部お手許にあるものですが）「現在と将来」というテーマを扱っております。第四節は（その一部がようやくお手許にあります。）「資本利子の源泉」を扱っており，そして第五節は「資本利子の高さ」を扱うでしょう。

貴下の著書の第二版はいつ印刷が完了するのか，もしよろしければお教え下さい。

敬具

858　ワルラスからベームへ

1888年11月26日

拝啓

昨夜，ご恵送に預かりました『資本の理論』と題する20ページの刷り物を受け取りました。そしてそれを今から数週間，貴下がお望みのように著作の最後を受け取るまでに一読するつもりです。

私自身は実際，生産と資本の三節と四節の終わりまで達することができないまま，『要論』第二版の23ページをもっています。しかしながらそれは活字にされていないページ19は別として印刷に付されましたが，私達はそれを優先的になさねばならないのです。

このページ19が印刷に付され，リカードの地代理論に関する図版ができるやすぐに，貴下に二番目の分冊を送ります。とりあえず，貴下に新しい資本 D_k, D_k', D_k'', …… の生産量の決定と純収益率 i の決定の理論とを含む37ページの――それは数か月前から中断され，この夏に私が貴下に要約したままの――校正刷りを送ります。

もしあなたが再びあなたの三編の「資本利子の高さ」の第五章においてそれに言及することができるなら私の大きな喜びとするところです。

私に関して言えば，私は序文のなかで貴下の著書を詳細に述べることを忘れないと期待してよいのです。

敬具

レオン・ワルラス

884　ワルラスからベームへ

ローザンヌ

1889年5月5日

拝啓

昨日，貴下に生産と資本化の理論に関する二つの私の『要論』の11ページ分（13-223）のゲラ刷りを送りました。これを送ることは新しい資本の最大効用の理論に関する19ページの決定刷りのために延び延びになっていたものです。この印刷自体がいくつかの困難をもたらし，さらに定理そのものの手直しを終えるのに長い期間を必要としたのです。

一月の最初の数日のうちに貴下の著書の最後のページをそしてその月の終わりまでには「政治経済雑誌」に掲載された貴下の要約の部分を抜き刷りを確かに受け取りました。(60)

すべてを調べ，そして<不満ながら>私達の二つの資本の理論ははっきりと相違していることを認めなければなりませんでした。このことは遺憾であります。限界効用の理論についての我々の一致は，同じく一致できる方途を見出せたはずです。しかしそうすることは断念しなければならないことです。

貴下は現在財と将来財との間の価値の相違から利子率を導出しています。そして私は現在財と将来財の間の価値の相違は直接的に決まらないし，それは利子率それ自体が新しい資本の総純収益の節約の総額に対する関係によって直接的に決まるということしか導出できないのです。そしてこの意見の対立は私達が同じ議論の土俵をもっていないということに鑑みて議論によって解消するという希望が少しもないだけますます深刻なものです。

問題は数学化することでしか解決しえない一つの数学の問題だと私は思っていますし，貴下は（純粋）政治経済学に数学を応用することができるということを信じていません。このような状況では，私達二人の間のこれら二つの学説と方法との問題を公に判断してもらうことしか私達には残されていないのです。しかしながら私の期待に反して，もしいくらかの説明あるいは譲歩が与えられることにより<お互いの譲歩によって>私達が接近できるならば，私は熱心にその機会をつかみたいと思っていることを信じて下さい。

敬具

レオン・ワルラス

ワルラスにおいて，資本財とは用役価格を伴って貸し付けられる耐久財である。資本から得られる純収入は用役価格から一定の償却費と保険料を差し引いた額で，利子率とは資本財価格に対する純収入の比率である。資本財に対する需要は，永続的に一定の収入を保証された「永続的純所得」という商品に対する需要からなり，資本財の需給が均衡するように資本財の生産量とその価格，貯蓄額，利子率が決定される。つまり，資本財の価格と生産費の均等を示す方程式，資本財の価格が

注（60） Böhm-Bawerk, "Une nouvelle théorie sur le capital", *Revue d'Economie Politique*, Marcho-April, 1889, vol. 3, No. 2, pp. 97-124.

純収入を利子率で割ったものに等しいことを示す方程式，永久純収入に対する需要を効用最大化条件から導き，すべての価格についての需要関数が導出される。そして最後に資本財に対する需給均等式である。(61)

ベームにおいて利子率は現在財と将来財の資源配分を通じた最適生産期間の決定によって決まってくるのである。いま，生産の技術的条件，賃金基金としての資本量，労働者数が与えられると，企業家は市場で与えられる賃金に応じて利潤を極大化するように最適生産期間と雇用労働者数を決定する。それと同時に労働の需給が一致するように賃金が調節されるので，経済全体として賃金と利子率と生産期間が同時決定されるのである。(62)

ベーム自身が指摘するワルラスとの相違は，もっぱら資本概念の相違である。ワルラスにおいて，資本は耐久財である固定資本に限定されている。だから，労働者を一定期間雇うための賃金基金に当たる一定の消費財は，ベームでは前貸資本として扱われるが，ワルラスにおいて資本としては扱われないのである。一方，ベームにおいて耐久財はどのように扱われているか。ベームは彼の『資本の積極的理論』の前半において，耐久財も資本として考慮に入れているが，後半の利子率決定の議論においてはもっぱら労働者に対する前貸資本としての賃金基金を資本として考察している。(63) このことは，分析の簡略化のためと解釈されよう。だから，本来的な両者の資本概念の相違は，次の点である。ワルラスにおいては資本財の耐久性という物理的性質が重要であるのに対して，ベームにおいてはある時点で将来の生産のために前もって財が投下されるという時間上の配分が重要である。このような両者の資本概念の相違は，ワルラスが生産における時間要素つまり生産期間を考慮しなかったことに由来する。同時に，ワルラスが生産用役提供者に対する前払ということを重視しなかったことにも原因がある。

ところで，ワルラスが手紙のなかで指摘する相違は利子を決定するメカニズムの問題である。ワルラスは，ベームとの相違を数学の問題と述べているが，その意味は利子を生産と交換の相互依存を示す連立方程式から決定するか否かということ，ひいては市場を通じて決定するか否かということと解することができる。この点に関するヴィクセルの指摘は，注目に値する。ヴィクセルは「ベ

注 (61) Léon Walras, *Éléments d'économie politique pure*, 1874-77, 久武雅夫訳『純粋経済学要論』岩波書店，1983, pp. 259-317. 英訳 W. Jaffé, *Elements of pure Economics*, 1954, pp. 267-312. ただし，ワルラスは永久純収入という財を考案したのは第四版になってからである。第三版まで，諸個人の貯蓄函数を経験的データとして扱っていた。永久純収入の導入によって，現在財と将来財の効用の差異という問題を回避できたと，ジャッフェは述べている。Léon Walras, *Elements of pure economics*, translated W. Jaffé, Orion edition, reprinted 1984, collation of edition, lesson 23, [h], pp. 587-588. 884の手紙からわかるように，すでに1889年にこのような定式化をワルラスは考慮しているにもかかわらず，第四版まで改訂が遅れた理由をワルラスの私生活上の困難にあるとジャッフェは述べている。W. Jaffé, "Unpublished Papers and Letters of Léon Walras", in *William Jaffé's Essays on Walras*, Cambridge Univ. Press, 1983, p. 33. "Walras's theory of capital accumulation", in ibid., pp. 139-150.

(62) *II Positive Theorie des Kapitales*, 1921, 英訳 *Positive Theory of Capital*, pp. 375-424.

(63) *II Positive Theorie des Kapitales*, 1921, 英訳 *Positine Theory of Capital*, pp. 339-357.

ーム・バヴェルクの資本理論」という論文の中で，ベームの上のような利子の市場における決定の議論は，彼の『資本理論の積極的理論』の最後の部分に見出されるのであり，もしワルラスがフランス語の雑誌の抜粋だけでなく，ベームの著書の最後の部分に目を通していれば，それを見出していただろうというのである。(64) ベームからのゲラ刷りの送付が，先の手紙からわかるように最後の部分が初め送られなかったのである。そして，ワルラスはベームを理解するのにフランス語の抜粋を用いたことも，窺い知れる。いずれにしても，ワルラスはベームの利子を決定する市場の議論を読み取らなかったのである。

しかし，ワルラスが認識したかどうかにかかわらず，両者の資本及び資本概念の相違に直結して，利子を決定するメカニズムの議論にも相違があらわれざるをえない。ワルラスにおいて貯蓄の総供給と新資本財の総需要の均衡が利子を決定する市場である。貯蓄が永久純収入に対する需要として与えられ，利子が新資本財の純収入の資本財価格に対する比率であることを考慮すれば，結局，貯蓄から得られる新資本財の所得が貯蓄額に対してどれくらいの割合であるかというかたちで利子率が決定されるにすぎない。これに対してベームは，企業家による最適生産期間の決定によって定まる利潤率から利子を導きだしているのである。ベームにおいては，通時的経済における企業家の意思決定の問題があらわれている。ワルラスとベームとでは，資本概念における時間要素のとらえ方の相違と並んで，主体行動における時間要素の考え方に違いがあると言える。

ワルラスに欠如しているベームの生産期間という時間要素を導入し，加えて耐久財の耐久期間という時間要素も考慮し，ワルラスの立場とベームの立場を統合した研究として安井琢磨の「時間要素と資本利子」という論文がある。(65) この論文は，ワルラスにない時間要素を導入しただけでなく，ベームによって明示的に分析されなかった耐久財資本も組み入れているという意味において，ワルラスとベームの資本理論を統合させ発展させた研究として学説史上注目すべきである。

887　ベームからワルラスへ

インスブルック

1889年5月20日

拝啓

貴下の傑出した著作の続編を，ご恵送下さいましてありがとうございます。(66) 貴下のご判断を非常

注 (64) K. Wicksell, "Böhm-Bawerk's Theory of Capital". *Selected Papers on Economic Theory,* Edited with introduction by Erik Lindahl, New York, A. M. Kelly, 1969, pp. 184-185. なお，ワルラスとベームの資本理論をともに考慮し，ベームの理論の再定式化が，ヴィクセルによってなされた。K. Wicksell, *Über Wort Kapital und Rente nach den Neueren Ökonomischen Theorien,* Jena (Verlag von Gustav Fischer) 1893.

(65) 安井琢磨，「時間要素と資本利子」，『安井琢磨著作集　第1巻——ワルラスをめぐって——』，創文社，S. 45, pp. 173-278. あるいは，『経済学論集』第6巻第9号，1936年9月，第6巻第10号，1936年10月。

(66) 手紙884の最初の段落参照。

に高く評価しているので，私の資本理論が貴下の同意を得られなかったなら，私達は共通の意見にたっていないということになりましょう。残念ながら同意を得られないので，目下国民経済学文献上に私達の二つの理論を公開することでおそらく引き継がれることになる議論の成り行きを待つほかないのであります。おそらく遅かれ早かれ私達の見解の統一への途は現れるでしょう。それは誰よりも私が喜ぶことであります。

今一度ここに感謝と尊敬の意を表したく存じます。

敬具

ベーム・バヴェルク

893　ベームからワルラスへ

インスブルック

1889年6月19日

拝啓

貴下の偉大な著作がこれで完全なものとなった，最近送って下さった部分を受け取りました。[67] 本当にありがとう存じます。残念ながら若干の細目において，あなたと意見をともにすることが許されていないとしても，私が貴下の著作のこの科学に対して有する高い意義を新たに評価すべきことを知っていると確信なさって下さい。

敬具

ベーム・バヴェルク

1286　ベームからワルラスへ

1896年12月26日

拝啓

すばらしいご著書『社会経済学研究』をご恵送賜りまして心から感謝致します。[68] それは，貴下が科学の世界に示された偉大で重要な贈り物であります。そして，貴下がそれ以上の多くのことを示されることを心より望んでいます。あなたのご健康と一層のご活躍をお祈り申し上げます。

敬具

ベーム・バヴェルク

1900年に，ベームから『資本理論の若干の諸問題』という著作がワルラスに送られるが，ワルラスはこの本から除外されたように感じ，ベームに非常によそよそしい返事を送る。その後両者の文通は最早なくなる。『要論』におけるベームへの言及も，決定版においては若干削られている。

注 (67) 『要論』第二版の Lesson 26.

(68) *Etudes d'économie social. Théorie de la réparatiton de la richesse social,* Lausanne & Paris, 1896.

1404　ワルラスからベームへ

ローザンヌ

1900年11月2日

拝啓

レオン・ワルラスはベーム・バヴェルク氏に，彼のすばらしい著作と，この度の彼の業績の完成に対し心からの謝意と賛辞をお送りします。[69] そして，『要論』の中に示されたその通りの利子と利子率の決定が，完全に限界効用の理論に基づいて築かれたものであるという事実にあえて丁重に注意を促すものであります。

敬具

レオン・ワルラス

IV.　ヴィーザーからワルラス宛書簡

ヴィーザーからワルラスへ二通，本に対するお礼とともに手紙が送られている。経済学の内容に立ち入った実質的な議論は展開されていない。

776　ヴィーザーからワルラスへ

プラハ

1887年2月12日

拝啓

最も新しいご著書をご恵送下さいまして，心からお礼申し上げます。そして，同時に「価値の源泉」についての私の本をお送り申し上げたく存じます。[70] 目下，私は価値についての新しい理論に従事しています。それをおよそ半年で出版するでしょう。そのなかで，私は自分の見解をほぼ完成した形で叙述したいと思っています。その際，私は貴下の学説のドイツにおける改革派に対する関係についてより正確に立ち入ることができ，また誤りを埋め合わせることができるでしょう。というのも，私は以前の著作であなたに言及しないということで，その誤りを犯してしまったのです。またゴッセンによる極めて注目に値する書物について言及し，私ができるかぎりにおいて，この著者に対してドイツが償わねばならぬとがを軽減しようとするものであります。

敬具

注 (69) Böhm-Bawerk, *Rinigo strittige Fragen der Kapitalstheorie,* drei Abhandlungen, Vienna and Leibzi, Braumuller, 1900. ジャッフェの脚注には，ワルラスがこの本から除外された様に感じたとある。久武雅夫訳『純粋経済学要論』岩波書店，1983, pp. 188-189. 英訳 W. Jaffé *Elements of pure Economics,* 1954, pp. 206-207. Collation of Edition lesson 16〔1〕, p. 581.

(70) 手紙747の第三段落参照。

この手紙は，ワルラスとベームの間でヴィーザーという人物についての確認がなされたほぼ二か月後に書かれたものである。ヴィーザーがワルラスの本を受け取っていることから，おそらくワルラスがベームを通じて知ったヴィーザーに自ら本を送付したと推察される。

980　ヴィーザーからワルラスへ

プラハ

1890年6月18日

拝啓

最近ご恵送下さいましたアウスピッツとリーベンによる価格理論に関するものに対して，並びに，以前受け取りましたものに，お礼を申し上げたく存じます。[71] その内容についてもっと立ち入って書くことができればと思っていたのですが，このところずっと理論研究にはばまれていたので，いつ私がそれに再び取り組むことができるようになるかまだわかりません。とりわけ，貴下との文通にとても興味をもっているので，それは残念でたまりません。というのも，私達の二つの価値理論はほかのだれよりも非常に一致しているという印象を私はもっているからです。私達の理論には表現形態の点で，きわだった対立があるように思います。つまりあなたの数学的な表現形態と――そう呼んでよいなら――私の哲学的表現形態とのあいだの対立です。そのうえ，私達の理論は，与えられた課題の一定の側面の各々が正しいものとなろうとすることによって，互いに望ましい仕方で補いあうと思われます。私はいつか最も重要な価値学説の章についての新しい主要理論を比較する研究にとりかかるつもりです。そしてその際，いかに私達の両理論が多くの点で互いに支えあっているかを示すつもりであります。効用と希少性のみが，なにか他の異質な原理を混入させずに，価値とそのあらゆる度合いを基礎づけるという一つの考えが承認されることを願っています。

敬具

フリードリッヒ・ヴィーザー

経済学に数学を用いるかどうかについて，ヴィーザーはメンガーと同じ立場にあるようである。ヴィーザーの『自然価値』[72] においても，ワルラスに言及する際，数学的方法に懐疑を示している。量の複雑な問題を表現する際に数学は有用であると述べた後に，「しかし，価値の理論において我々はもっと明らかにしなくてはならないことがある。価値という曖昧な概念が，明らかにされねばならない，つまりその多様な形態が叙述されなくてはならない。経済生活における価値のサービス

注 (71) Léon Walras, "Obsrevation sur le principe de la théorie du prix de MM. Auspitz et Liebon", *Revue d'économie Politique*, May-June, 1890, vol. 4, No. 3, pp. 320-324.

(72) Von Wieser, *Der natürliche Werth*, Vienna, Hölder, 1889. C. A. Mulloch's translation, *Natural Value*, London and New York, Macmillan, 1893, pp. XXXIII-IV.

が分析されねばならない。価値とその他の経済現象に対する関係が示されねばならない。簡単に言えば，数ではなく，言葉を要する価値の哲学を我々は与えなくてはならない。[73]」ワルラスから一通も手紙が出されていない理由はわからないが，経済学における数学の問題について見解が異なることが原因の一つとして考えられよう。ワルラスは，メンガー，ベームそしてヴィザーのときも最後は数学に対する考え方が発端となって実質的な文通をやめている。

V. 結　　び

以上のように，ワルラスとオーストリア学派の創始者達との書簡をみてくると，限界効用学説における見解の一致とは裏腹に，様々な意見の対立がみられるのである。

メンガーとワルラスにおいては，経済学の方法論に関する議論が展開された。そこでの議論の対立における原理的な問題としては，述べられた命題の性格をいかに理解するか，という問題である。メンガーは，経済現象の究極的な構成要素を確定し，そこから思惟法則としての精密法則を確立しようとした。そしてこの構成要素は，一つの「実在」として理解され，しかもそこから導出される法則は，経験による験証なしに妥当するものとされた。その意味で，メンガーの精密法則は，カントの「ア・プリオリな総合的判断」に相当すると考えられる。このような性格の法則を，いかに評価すべきかという問題が提起されよう。

現代の科学哲学の見地からみれば，そのような「ア・プリオリな総合的判断」は存在しない。カントは，そのような判断の存在を肯定し，幾何学をその例にあげたが，それは純粋に公理にもとづく演繹体系としての幾何学と，それを世界に適用することを扱う物理的幾何学とを混同したことから生じた誤りであった。

このことから，メンガーの「精密法則」は，彼の意図にもかかわらず，経験による験証を拒否すれば，単なる公理にもとづく演繹体系にすぎないし，経験的世界について語らしめようとすれば，その妥当性は経験による験証に委ねられねばならないであろう。

こうした科学哲学の成果を踏まえれば，メンガーとワルラスとの論争における原理的な対立は解消されるかのようである。

メンガーが「精密法則」なる概念で意味しているものは，究極的な構成要素から経済現象が生成してくるプロセスの因果連鎖そのもののことである。いいかえれば，公理とそこからの演繹体系のすべてを包括したものをそれによって意味しているのである。例えば，価格という現象が，究極的な構成要素からいかに生じるか，それを因果の連鎖として逐次構成していったもの，あるいはその総体を「精密法則」という用語で理解しているのである。

すでに筆者の一人は，メンガーの「精密法則」がカントの意味で「ア・プリオリな総合的判断」に相当することを示した。そこでの論拠は，メンガーの究極的な構成要素が「実在」と解釈される

注 (73)　手紙642参照。

がゆえに「総合的」であり，そこから導出された命題は経験による験証なしに妥当するがゆえに「ア・プリオリ」とするものであった。しかしながら，筆者はこの論拠に不十分な点があると現在は考えている。科学哲学の成果に鑑みて，メンガーの命題が「分析的」であるか「総合的」であるかの最終的な判定は，メンガーの言語体系を明示し，その言語分析を行った上で下されるべきものと考えるからである。そうした上での結論は，まだ得ていない。それは残された課題であるが，問題を再整理するための資料としてメンガーとワルラスとの書簡を訳出した。経済学史の研究者には，別の意味で役に立てば幸いである。

一方，ベーム・バヴェルクとワルラスの資本に関する見解の相違は，より具体的なレベルで理論上の問題を提示している。このことは時間を通じた資源配分の問題を，一般均衡理論とのかかわりで研究しなおすことに多くの光を投げかける可能性がある。本論で述べたように，ワルラスとベームの資本理論の一つの統合は，安井論文において展開されている。ただ，そこで展開された統合は，ベームの『資本の積極的理論』のすべての要素が考慮されているわけではない。

周知のようにベームの『資本の積極的理論』は主に二つの部分からなる。一つは，資本利子の起源を将来財と現在財の価値の評価の相違から説明する部分である。もう一つは，資本利子の水準決定を扱う部分である。これらの二つの部分は，本来一貫性をもって扱われるべきなのに，ベームにおいて両者の間には断絶がある。つまり，第二の部分の資本利子の水準決定の問題は，第一の部分の将来財と現在財の価値評価の議論と全面的には関連づけられていないのである。とくに，消費者主体の主観的な現在財と将来財の価値評価という側面は，ワルラスとベームの資本理論を発展させる上で十分考慮に入れられてきたと言えない。にもかかわらず，この側面はベームの生産期間の概念と並んで重要な骨格をなすものであろう。生産における時間要素とともに需要側における時間要素を考慮したワルラスとベームの資本理論の発展的統合の問題が，一つの残された問題となろう。

限界革命期の経済学研究が今日の経済学の一つの出発点であるなら，その点に立ち返って進むべき道を検討することができるのである。

武　藤　　功（慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程）
中　野　聡　子（慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程）